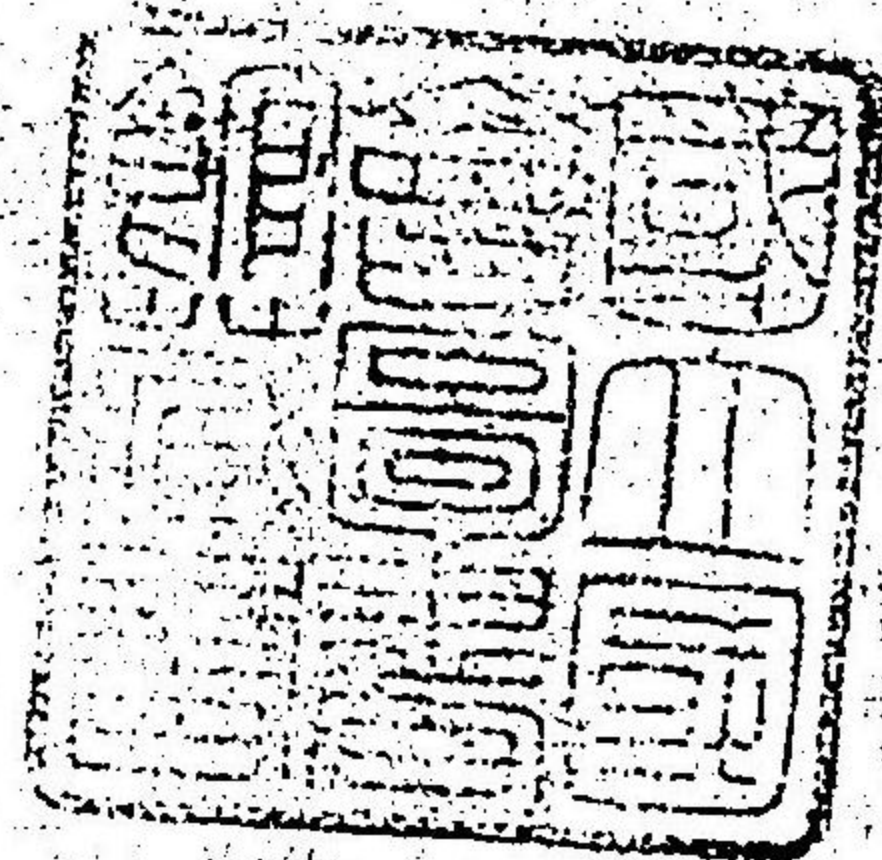


岸本宗道  
大宮宗司  
校訂

日本書紀  
全

菊園舎藏版



336518

序  
 謹て惟れが我六國史ある猶彼尚書春秋あるか如し  
 然れども彼皆魯人孔子の刑定筆削する所之を我史  
 の勅撰に出でハ親王大臣の手に成る者ハ視まば蓋  
 し固より霄壤の異あり特は其体裁の嚴正紀事の慎  
 密以て我建國垂統の由来を詳にして立極垂統の淵  
 源を明にするは至りてハ亦彼尚書春秋の能く及ぶ  
 所に非るあり凡そ我臣民たる者固に宜しく日夕捧  
 誦して以て盛徳大業の因て本づく所重暉積慶の益  
 大なる所以を仰鑒して以て臣子忠孝の誠を致すべ

二  
きあり然るに其勅刊をる所僅に書記神代の巻止  
り其他の五史に至りても亦未だ訂正を經る故を以  
て誤脱極めて多く譌訛亦甚たし學者之を慨する者  
と久し頃日我友岸本宗道君大宮宗司君胥謀りと訂  
訛正譌猶之を井上先生に質し之を活刷に附して以  
て世に行はむを抑も彼土尚書春秋の如き一  
夏史の記す所一の魯國の舊文は過ぎを而も猶之を  
以て經として以て教訓正俗の大資となを而して我  
學者の國史を視る之を班馬以下の史は同じく未  
だ曾て之を以て經とし尊びて以て教化の準極とあ

三  
はを聞かむ恒に以て深憾とも蓋し亦其未だ全く修  
正せざるを以てあり今此刊の成る學者をして悔舊  
改觀依りて以て人倫の模範とあして風教の明鑒と  
なすに至らば其國體を尊び人心を正すは於て其益  
たる誠は大に且盛なりとも嗚呼我神明の國宇宙は  
卓立し神聖首出爲君爲師土を開き民を生して以て  
寶祚を拱護し之を億萬斯年傳ふる者固より偶然  
の故に非をして之を紀する者亦正統天皇の宸允に  
出で、天胤神胄の手は成るときも則ち宇内萬國未  
だ一書の髣髴たる者を見たらば則ち臣子の此書

を讀む者亦豈彼尚書春秋を以て同視をへけむや謹  
て一言を書して以て序とすと云爾

皇明治二十五年七月

大學教授正七位内藤耻叟謹序

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 皇、明、治、二十、五、年、七、月、大、學、教、授、正、七、位、内、藤、耻、叟、謹、序、）

### 舍人親王略傳

舍人親王は、天武天皇の第三子にてまします。性まことくどかしく、  
學を好み、博く諸子にわたらせたまふ。持統天皇の時、爵淨廣貳を  
授けられ、尋きて二品に敘せらる。慶雲元年、封二百戸をまされ、始  
めて、金租を賜はる。養老二年、一品を授けられ、三年、内舍人二人、大  
舍人四人、衛士三十人を賜はり、食邑百戸をまさる。四年、日本書紀  
三十卷系圖一卷を上る。詔して、太政官の事を知らしめたまふ。聖  
武天皇の天平七年うせたまひぬ。御年六十歳にてまします。太政  
大臣を贈らる。後に追號ありて、崇道盡敬天皇と申す。

太安麻呂略傳

太安麻呂は、神八井耳尊の後ふり。慶雲の初從五位に敘せられ、和銅中、正五位上に進められ、勳五等を授けらる。詔を蒙り、古事記を撰びて上る。これ我國史の今に存するもの、最も古きものなり。舍人親王の日本書紀を撰びたまふや、紀清人と共に、親王を輔けたり。靈龜中、進みて從四位下とふり、氏の長者とふる。尋きて民部卿となり、養老七年に卒せり。

日本書紀

緒言

一 予輩おほけふくもこの書の校訂を志をへて、世にこの書を出すものは、實に宿志あるによりてあり。こゝにいさゝかそのよしを志るしつけて、世人に知らしめてむとす。

一 予輩さきに、皇典講究所に學びて、この書の教授を井上頼國先生にうくるや、先生諸書を参考して、字句の校正をなす。その誤謬錯簡、實に驚くべきものありしふり。予輩思へらく、なほかゝる誤謬錯簡を免れざるものあるは、うれたきことあり。この書著されてより、今に至るまで、正に一千百七十年餘を経て、その間この書の板行せるもの、數種ありといへども、一も完全なるものあらざるは、いかにぞや。學者の力いまだ、足らざることをいはいへ

おもへば、いよいようれたきや。されども、予輩の學識淺薄なる、古今學者の、いまだ爲し得ざるところを、おすべきにあらず。されども、古人、已に、校訂の材料を遺して漏すところなし。たゞ、今人が、それを採集して、古人の功勞を、空しからざらぬめむことを、つとめおぼすなはち、この書の完全を見るべきあり。ざるを、今人のつとめざる、たまゝ、出でたりと見れば、神代卷のみにとゞまるものあり。ざるを、是等の書は、原板を改作して、ほどほど、その面目を一新せたるものなり。その最も甚しきものはいたりては、私見をもて改作せたるものもあるあり。かくては、舊體を損ふおそれあるのみならず、學者の本意とすべきところにあらず。予輩、をぢふしと。いへども、この書の完全せたるものゝ、世にあらずるを、おげき、また、それを校訂すことでは、古人の功勞を、空しからざらしめむ

ことをおもひて、いまだ、あらゆる書をもて、校訂しをはり、世にいたす。みづから信ず。世上、いまだこの書に比ふべきものあらずと。されども、つらゝ、おもふに、この書も、おほ、いまだ、完備せたるものにはあらず。それは、活版にして、數本の訓を、悉く舉ぐるに、あたはず。これをもて、予輩は、他目を契りて、猶、數本をあつめ、櫻木に彫りて、古字と古訓とを、悉くおぼしめて、完全なるものにならしめむとす。

一 この書は、獨、史籍として、貴ぶべきのみにあらず。その國語、國文學上におきて、裨益するところのもの、甚だおほし。これ、國語、國文の基礎なるものあればなり。

一 文章は、漢文を用ゐたりといへども、國音、國語に關するところは、その損はむことを、つとめたるをもて、猶、漢文とは、大に異ふ

るところあり。

一 この書は、寛文本によりて、標註校訂したるものなり。その中、字形舊様にして、異状なるものありといへども、いかにせむ、活版にもものするをもて、遺憾ふから、悉く、その舊體を存することあたはず。

一 文句の誤謬、著しきものには、「」をもてかこみ、その錯簡、攙入にかゝるものには、「」をもて圍みたり。

一 この書の標註に引くところ、その全名をかゝげたるもの、とそを省きたるもの、とあり。その全名を掲げたるものには、左の如し。

古 事 記  
日 本 後 紀

日 本 紀 略  
古 語 拾 遺  
天 喜 書  
令 義 解  
延 喜 式  
西 宮 記  
年 中 行 事 秘 抄  
長 寛 田 勘 文  
仙 覺 抄  
河 海 抄  
帝 王 編 年 記  
舊 事 紀





日本紀私記	日本書紀考	黑羽日本紀備考	本居宣長本	伊勢貞丈本	村田春海本	山田以文本	小山田與清本	伴信友本	小寺清先本	
田本	考本	備考				校本				
續日本紀	釋日本紀	類聚國史	和名類聚抄	聖德太子傳	黑羽本	神代口訣	日本書紀講述抄	日本紀纂疏	日本紀通證	日本紀集解
續紀	釋紀	類史	類聚抄	太子傳	黑本	口訣	抄本	纂疏	通證	集解

本書に引くところの重なるものは大かたかくのごとし。その他の諸本をば、一本、或は異本とあるし、また三本以上にあふべきもの

日本紀私記	日本書紀考	黑羽日本紀備考	本居宣長本	伊勢貞丈本	村田春海本	山田以文本	小山田與清本	伴信友本	小寺清先本
私記	考本	備考				校本			

はすべし諸本とあるしなり。一本書を校訂するにあたりて、大に力を盡されしは、井上頼國先生ふり。先生寸暇ふきにもかゝはらず、數十種の秘本を集めて、予輩に與へられたり。その懇篤なる、以て我もふべきあり。

明治二十五年七月

岸本宗道 大宮宗司 志るす

日本書紀卷第一

井上頼國 檢閱  
岸本宗道 校訂  
大宮宗司

神代上

古天地未剖陰陽不分渾沌如雞子溟滓而含牙及其清  
 陽者薄靡而爲天重濁者淹滯而爲地精妙之合搏易重  
 濁之凝場難故天先成而地後定然後神聖生其中焉故曰  
 開闢之初洲壤浮滯猶游魚之浮水也于時天地  
 之中生大物狀如葦牙使化爲神號國常立尊  
 訓美皇等也畏天國狹槌尊次豐斟淳尊凡三神矣乾道獨化所  
 下皆倣此

○十國常立尊二  
 ○七字本立尊二  
 ○空因此化於  
 ○物若浮有於  
 ○牙有可下五  
 ○本化爲神下  
 ○○故曰二字  
 ○○可從本本  
 ○○共作本與  
 ○○三本本與  
 ○○三本本與  
 ○○三本本與  
 ○○三本本與

日本書紀卷第一



○伊弉諾尊下  
玉本有伊弉冉  
尊四字又三本  
有與伊弉冉尊  
五字坤以下十  
四字恐後人加  
○神世三本作  
○代字一本作  
○概也或曰  
○概也二字一  
○伊弉諾尊伊  
非冉尊下古本  
有伊弉冉尊  
音活百十四字  
亦下古本有  
○潮三本作湖

書曰此神青檀城根尊之子也  
一書曰國常立尊生天鏡尊天鏡尊生天萬尊天萬尊生沫蕩  
尊沫蕩尊生伊弉諾尊沫蕩此云阿和那伎  
凡八神矣乾坤之道相參而化所以成此男女自國常立尊迄伊  
弉諾尊伊弉冉尊是謂神世七代者矣  
一書曰男女耦生之神先有埴土煮尊沙土煮尊次有角織尊  
活織尊次有面足尊尊根尊次有伊弉諾尊伊弉冉尊(概櫛  
也)  
伊弉諾尊伊弉冉尊立於天浮橋之上共計曰底下豈無國歟  
迺以天之瓊瓊玉也矛指下而探之是獲滄溟其矛鋒滴瀝之  
潮凝成一島名之曰磯敷廬島一神於是降居彼島因欲共  
為夫婦產生洲國便以磯敷廬島為國中之柱此云美而陽神

○意哉玉本作  
研說  
○水本日據上  
文雄元上亦當  
有一字疑脫  
○不詳三本作  
不詳  
○快元々集作  
○先以淡路洲  
五字楓本作先  
生淡路洲以此  
淡路洲十字  
○陰岐三本作  
○百備子洲類  
史無子字

左旋陰神右旋分巡國柱同會一而時陰神先唱曰意哉遇  
可美少男焉鳥沙男此云陽神不悅曰吾是男子理當先唱如何婦  
人反先言乎事既不祥宜以改旋於是二神却更相遇是行  
也陽神先唱曰喜哉遇可美少女焉鳥沙女此云因問陰神曰汝  
身有何成耶對曰吾身有一雌元之處陽神曰吾身亦有雄元  
之處思欲以吾身元處合汝身之元處於是陰陽始適合為夫  
婦及至產時先以淡路洲為胞意所不快故名之曰淡路洲迺生  
大日本日本此云耶摩豐秋津洲次生伊豫二名洲次生筑紫洲  
次雙生隱岐洲與佐度洲(世人或有雙生者象此也)次生越洲次  
生大洲次生吉備子洲由是始起大八洲國之號焉即對馬島  
壹岐島及處處小島皆是潮沫凝成者矣亦曰水沫凝而成也  
一書曰天神謂伊弉諾尊伊弉冉尊曰有豐葦原千五百秋瑞

○浮橋下三本  
古本等有指字

○治海三本作  
治海

○流之上古本  
有數字  
○淡洲古本作  
淡洲  
○上階於天下  
古本有而字

穗之地宜汝往脩之。廼賜天瓊戈於是。神立於天上。浮  
橋投戈求地。因畫滄海。而引舉之。即戈鋒垂落。之潮結  
而爲島。名曰磯敷。廬島。神降居彼島。化作八尋之殿。又  
化豎天柱。陽神問陰神曰。汝身有何成。耶對曰。吾身具成  
而有稱陰元者。一處。陽神曰。吾身亦具成。而有稱陽元者。一處。  
思欲以吾身陽元。合汝身之陰元。云爾。即將巡天。柱  
約束曰。妹自左。巡吾當右。巡既而分。巡相遇。陰神乃先唱  
曰。妍哉可愛。少男歟。陽神後和之曰。妍哉可愛。少女歟。遂爲  
夫婦。先生姪兒。便載葦船而流之。次生淡洲。此亦不以充兒數。  
故還復上詣於天。具奏其狀。時天神以大占而下。合之  
乃。教美曰。婦人之辭。其已先揚乎。宜更還去。乃卜定時日。  
而降之。故。神改復巡。柱陽神自左。陰神自右。既遇之。

○隱岐一本作  
隱岐

○哀弘仁私記  
作衣

○善乎古本作  
善哉

○指及舟之下  
古本有舟字

○相謂古本作  
相語

時陽神先唱曰。妍哉可愛。少女歟。陰神後和之曰。妍哉可愛。  
少男歟。然後同宮共住。而生兒。號大日本。豐秋津洲。次淡路  
洲。次伊豫。三名洲。次筑紫洲。次隱岐。三子洲。次佐度洲。次越洲。  
次吉備子洲。由此謂之天八洲國矣。瑞此云。彌圖。妍哉。此云阿  
那。而惠夜。可愛。此云哀。天占此云布刃磨爾。  
一書曰。伊弉諾尊。伊弉冉尊。神立于天霧之中。曰。吾欲得  
國。乃以天瓊矛指垂而探之。得磯敷廬島。則拔矛而喜之。  
曰。善乎國之在矣。  
一書曰。伊弉諾伊弉冉。神坐于高天原。曰。當有國耶。乃  
以天瓊矛畫成磯敷廬島。  
一書曰。伊弉諾伊弉冉。神相謂曰。有物若浮。蠶其中。  
蓋有國乎。乃以天瓊矛探成島。名曰磯敷廬島。

○淡洲二字諸本無恐投入  
○據淡洲異本作淡洲或陰岐國

○淡洲三字諸本無此亦恐投入

一書曰陰神先唱曰美哉善少男時以陰神先言故為不祥  
更復改巡則陽神先唱曰美哉善少女遂將合交而不知其術  
時有鵲鶴飛來搖其首尾二神見而學之即得交道  
一書曰二神合為夫婦先以淡路洲淡洲為胞生大日本豐秋  
津洲次伊豫洲次筑紫洲次雙生隱岐洲與佐度洲次越洲次  
大洲次子洲  
一書曰先生淡路洲次大日本豐秋津洲次伊豫三名洲次隱  
岐洲次佐度洲次筑紫洲次壹岐洲次對馬洲  
一書曰以破馭盧島為胞生淡路洲次大日本豐秋津洲次伊  
豫三名洲次筑紫洲次吉備子洲次雙生隱岐洲與佐度洲  
次越洲  
一書曰以淡路洲為胞生大日本豐秋津洲次淡洲次伊豫

○研設古本作淡路洲一本  
○海下古本有原字  
○野題下古本有神一書曰四  
○共下古本有而官二字  
○於是下古本有於下三字  
○日本先作古本  
○日靈下古本  
○光華古本作  
○是時以下八  
○字荷田東本  
○人為小東本  
○加小東本  
○月夜見下  
○本有亦曰二  
○字  
○亞日下應本  
○有神字

名洲次隱岐三子洲次佐度洲次筑紫洲次吉備子洲次大洲  
一書曰陰神先唱曰妍哉可愛少男乎便握陽神之手遂為夫  
婦生淡路洲次蛭兒  
次生海次生川次生山次生木祖句句迺馳次生草祖草野姬亦  
名野槌既而伊弉諾尊伊弉冉尊共議曰吾已生大八洲國及  
山川草木何不生天下之主者歟於是共生日神號大日靈貴  
大日靈貴此云於保比屢伴能武智要音力丁此子光華明彩  
反一書云天照大神一書云天照大日靈貴  
照徹於六合之內故二神喜曰吾息雖多未有若此靈異  
之兒不宜久留此國自當早送于天而授以天上之事是時  
天地相去未遠故以天柱舉於天下也次生月神  
月夜見其光彩亞日可以配日而治故亦送之于天次生  
蛭兒離日三歲脚踏不立故載之於夫磐椽樟船而順風放棄矣

○大生上三本  
○有然亦二字  
○上三本有一  
○日三本下以  
○三本作不字

○山本日由之  
上其疏有字

○有化下可有  
出之二字歟恐

○山本日珍此  
以下十八字古  
本分注

○山本日伊辨  
諸下古本有奪  
字

生イハヒ素ス菱シ鳴ナリ尊ミコト。此神有勇悍以安忍且常以哭  
泣ナク為行故令國內人民多以天折復使青山變枯故其父母一  
神救素菱鳴尊イハヒ汝ニ甚無道不可以君臨宇宙固當遠適之  
於根國矣遂逐之

一書曰伊辨諾尊曰吾欲生御宙之珍子乃以左手持白  
銅鏡則有化出之神是謂大日靈尊右手持白銅鏡則有化  
出之神是謂月弓尊又廻首顧眄之間則有化神是謂素菱  
鳴尊即大日靈尊及月弓尊並是質性明麗故使照臨天地  
素菱鳴尊是性好殘害故令下治根國珍此云于圖顧  
眄之間此云美屢摩沙可利爾  
一書曰日月既生次生蛭兒此兒年滿三歲脚尙不立初  
伊辨諾伊辨冉尊巡柱之時陰神先發喜言既遠陰

○性惡上應本  
右原字

○殘傷古本作  
殘餘

○交應本作形

○山本日問象  
以下古水分注

○五下三本  
有矣字  
○山本日亦云  
神避矣五字一  
本為後人加筆

○山本日天吉  
葛以下十八字  
水本為分注古  
本同  
又云一云三本作

陽之理所以今生蛭兒次生素菱鳴尊此神性惡  
常好哭悲國民多死青山為枯故其父母救曰假使汝  
治此國必多所殘傷故汝可以馭極遠之根國次生鳥磐  
檣樟船輒以此船載蛭兒順流放棄次生火神軻遇突智  
時伊辨冉尊為軻遇突智所焦而終矣其且終之間臥生  
主神壇山姬及水神罔象女即軻遇突智娶壇山姬生稚產靈  
此神頭上生蠶與桑臍中生五穀罔象此云美都波  
一書曰伊辨冉尊生火產靈時為子所焦而神退矣亦云神  
避矣其且神退之時則生水神罔象女及土神壇山姬又生  
天吉葛天吉葛此云阿摩能與佐圖羅二云與曾豆羅  
一書曰伊辨冉尊且生火神軻遇突智之時悶熱懊惱因為  
吐此化為神名曰金山彦次小便化為神名曰罔象女次大便

○經三本作短

○經三本作傳

○山本曰句句  
○水本曰按土  
○神下疑脫等字  
○化去下三本  
○有矣字  
○妹者下三本  
○有云々矣三本

化為神名曰壺山媛山媛大矣其出言轉音曰壺山媛  
一書曰伊弉冉尊生火神時被灼而神退去矣故葬於紀  
伊國熊野之有馬村焉土俗祭此神之魂者花時亦以花  
祭又用鼓吹幡旗歌舞而祭矣  
一書曰伊弉諾尊與伊弉冉尊共生大八洲國然後伊弉諾  
尊曰我所生之國唯有朝霧而薰滿之哉乃吹撥之氣化為  
神號曰級長戶邊命亦曰級長津彥命是風神也又飢時生  
兒號倉稻魂命又生海神等號少童命山神等號山祇水  
門神等號速秋津日命木神等號句句廼馳土神號壺安神然  
後悉生萬物焉至於火神軻遇突智之生也其母伊弉冉  
尊見焦而化去乎時伊弉諾尊恨之曰唯以一兒替我愛之妹  
者乎則匍匐頭邊匍匐脚邊而哭泣流涕焉其淚墮而為神

○是即下一本  
○有香山二字  
○飲岳三本作

○一曰三本作  
○一書曰而以下  
○細字

○問象以下三  
○本大字  
○有國入二字

○山本曰雖  
○抄云雖然下有  
○關文是說為是  
○爪下三本作  
○一山本曰紫字  
○一本无

○其緣下三本  
○有起之二字

是即畝丘樹下所居之神號啼澤女命矣遂拔所帶十握劍斬  
軻遇突智為三段此各化成神也復劍双垂血是為天安河邊  
所在五百箇磐石也即此經津主神之祖矣復劍垂血激  
越為神號曰囊速日神次熯速日神其囊速日神是武甕槌  
神之祖也亦曰囊速日命次熯速日命次武甕槌神復劍垂  
垂血激越為神號曰磐裂神次根裂神次磐筒男命一曰磐  
筒男命及磐筒女命復劍頭垂血激越為神號曰聞靈次聞  
山祇次聞罔象然後伊弉諾尊追伊弉冉尊入於黃泉而及  
之共語時伊弉冉尊曰吾夫君尊何來之晚也吾已食泉之  
竈矣雖然吾當寢息請勿視之伊弉諾尊不聽陰取湯津爪  
櫛牽折其雄柱以為秉炬而見之者則膿沸虫流今世人夜忌  
一片之火又夜忌櫛櫛此其緣也時伊弉諾尊大驚之曰吾













○物根原本作

○附三本作汝

○所祭三本作

○陵謂本作凌

○下簡二字

○三本作投

○只聖本作故

○暫奉本作對

○井上和國曰

○來耳下茲脫文

○三津本作作

時天照大神敕曰原其物根則入坂瓊之五百箇御統者是吾  
 物也故彼五男神悉是吾兒乃取而子養焉又敕曰其十握劍  
 者是素戔嗚尊物也故此三女神悉是爾兒便授之素戔嗚尊  
 此則筑紫胸肩君等所祭神是也  
 一書曰日神本知素戔嗚尊有武健陵物之意及其上  
 至便謂弟所以來者非是善意必當奪我天原乃  
 殺丈夫武備射帶十握劍九握劍八握劍又背上負靱又  
 臂著被威高勒手握弓箭親迎防禦是時素戔嗚尊告曰  
 吾元無惡心唯欲與姊相見耳只為暫來耳於是日神  
 共素戔嗚尊相對而立誓曰若汝心明淨不有後言奪我  
 意者汝所生兒必當為我子而食之食所帶十握劍生兒  
 號曰津彥彥彥又食所帶十握劍生兒號曰津彥彥彥

○水本曰亦名

○入字疑分

○五男三本作

○所祭一本

○無也字

○通下三本有

○別本本作

○到之本無

○本本曰

○中本曰

○取下五本

時素戔嗚尊以其頸所嬰五百箇御  
 統之璽璽乎天澤者素亦名素而食之乃生  
 正哉昔勝勝連日天忍尊奉天澤彥彥命次  
 系穗日命天熊野忍踏命是五男神矣故素  
 戔嗚尊既得勝  
 於於是日神乃知素戔嗚尊固無惡意以日  
 神所生王  
 神今降於筑紫洲四教之曰吾在神其  
 神居道案春  
 神夫孫而為夫孫所祭也  
 六書因素戔嗚尊將昇天陸有靈神靈羽明  
 而進以瑞入坂瓊之曲玉故素戔嗚尊持其  
 天璽也是時天照大神  
 尊對曰善所以來者實欲與姊相見耳亦欲  
 坂瓊也曲玉耳不取則有意也時天照大神復問曰汝言虛













○住者一本無  
○覓文本本  
○與字一本无  
○哭類史作略  
○之王本作略

○八箇一本無  
箇字

○期上三本有  
○水木曰  
○當作下  
○五三本有  
○入字一本無  
○乃三本有  
○乃三本有  
○乃三本有  
○乃三本有

哭之聲故尋聲竟往者有一老公與老婆中間置一少女撫而哭  
之素美鳴尊問曰汝等誰也何為哭之如此耶對曰吾是國神  
號脚摩我妻號手摩乳此童女是吾兒也號奇稻田姬所以哭  
者往時吾兒有八箇少女每年為八岐大蛇所吞今此少童且臨  
被吞無由脫免故以哀傷素美鳴尊一救曰若然者汝當以女奉  
吾耶對曰隨救奉矣故素美鳴尊立化奇稻田姬為湯津爪櫛  
而補於御髻乃使脚摩乳手摩乳釀八醴酒并作假肢云此  
八箇神體曰槽而盛酒以待之也至期果有大蛇頭尾各有  
八岐醜類赤酸醬阿面而松栢生於背止而蔓延於八丘八  
谷之間及至得酒頭吞一六樽飲醉而睡時素美鳴尊乃拔所  
帶手握劍擊其蛇至尾劍斷少缺故割製其尾視之中有一  
劍此所謂草薙劍也名天雲劍云云大蛇所居之上帶有一書曰

○大已賣神  
○宮主本無  
○宮主本無  
○宮主本無  
○宮主本無  
○宮主本無  
○宮主本無  
○宮主本無  
○宮主本無  
○宮主本無

○大已賣神  
○宮主本無  
○宮主本無  
○宮主本無  
○宮主本無  
○宮主本無  
○宮主本無  
○宮主本無  
○宮主本無  
○宮主本無

以素美鳴尊用草薙劍擊其蛇至尾劍斷少缺故割製其尾視之中有一  
劍此所謂草薙劍也名天雲劍云云大蛇所居之上帶有一書曰  
乎乃上獻於天神也然後行其婚禮之處遂到出雲之清地  
焉清地乃言曰吾心清清之地也於彼處建宮或云時  
鳴尊取之曰夜句茂多苑伊都毛夜朝殿殿乃相與適合而  
生兒夫已貴神因初之曰吾兒首首者即脚摩乳手摩乳也故  
賜號於二神曰稻田宮主神已而素美鳴尊遂就於根國矣  
書曰素美鳴尊自天而降到於出雲簸之川上則見稻田  
宮主寶狹之八箇耳女子號稻田媛乃於奇御戶為起而產兒  
號清之湯山主三名狹漏彥八島藤一云清之繁名坂輕彥八  
島手命又云清之湯山主三名狹漏彥八島野此神五世孫即  
大國主神小竹世此云斯效云



○翠季本作辟

○會一本作神

○鳥下季本有漢江二字

○神尊水本文  
○神尊水本文  
○神尊水本文  
○神尊水本文  
○神尊水本文  
○神尊水本文  
○神尊水本文  
○神尊水本文  
○神尊水本文  
○神尊水本文

渡到出雲國鏡川上所居鳥上之峯時彼處有吞人夫蛇素  
莖鳴尊乃以夫蛇斫之劍斬彼夫蛇時斬蛇尾而双缺即擊  
而視之尾中有三神劍素莖鳴尊曰此不<sub>レ</sub>可以吾私  
用也乃遣五世孫夫之尊根神正奉於夫此今所謂菟羅劍  
矣初五十猛神天降之時多將樹種而下然不殖韓地盡以持  
歸遂始自筑紫凡大八洲國之內莫不播殖而成青山焉  
所以稱五十猛命為有功之神即紀伊國所坐大神是也  
一書曰素莖鳴尊曰韓鄉之島是有金銀若使吾皇所御之  
國不有浮寶者未是佳也乃拔髮鬚散之即成杉又拔散胸  
毛是成檜檜毛是成椈椈毛是成櫟櫟毛是成其寶厚稱  
太<sub>レ</sub>曰椈椈及椈椈此兩樹者可以為浮寶椈可以為瑞宮之  
椈椈可以為顯見者生與浮寶椈椈之具夫須噉心實椈種

○渡類是作度

○御時一本無  
○御時一本無  
○御時一本無  
○御時一本無  
○御時一本無  
○御時一本無  
○御時一本無  
○御時一本無  
○御時一本無  
○御時一本無

皆能播生子時素莖鳴尊之子號曰五十猛命妹大屋津姬命  
次抓津姬命凡此三神亦能分布木種即奉渡於紀伊國也  
然後素莖鳴尊居熊成峰而遂入於根國者矣棄尸此云  
須多杯<sub>レ</sub>椈此云磨紀  
一書曰大國主神亦名大物主神亦號國作大己貴命亦曰葦  
原醜男亦曰八千戈神亦曰大國玉神亦曰顯國玉神其子凡  
有一百八十一神夫大己貴命與少彥名命戮力一心經  
營天下復為顯見蒼生及畜產則定其療病之方又為攘鳥  
獸昆虫之災異則定其禁厭之法是以百姓至今咸蒙恩  
賴嘗大己貴命謂少彥名命曰吾等所造之國豈謂善成  
之乎少彥名命對曰或有所成或有不成是談也蓋有  
幽深之致焉其後少彥名命行至熊野之御崎遂適於常世

○水本曰至及  
舊事紀作至乃  
疑乃至誤而類  
御

○營宮下古本  
有於字  
○大三輪下一  
本有遺祖也三  
○君等下古本  
有其而三字  
○五十餘命  
下古本有之  
也三字  
○通古本作嬰

鄉矣亦曰至淡島而緣粟莖者則彈漣而至常世鄉矣  
自後國中所未成者大已貴神獨能巡造遂到出雲國乃興  
言曰夫葦原中國本自荒甚至及磐右草木威能強暴然吾  
已摧伏莫不和順遂因言今理此國唯吾一身而已其可  
與吾共理天下者蓋有之乎時神光照海忽然有浮來  
者曰如吾不在者汝何能平此國乎由善在故汝得建其  
大造之績矣是時天已貴神問曰然則汝是誰耶對曰吾  
是汝之幸魂奇魂也天已貴神曰唯然迺知汝是吾之幸  
魂奇魂余欲何處住耶對曰吾欲住於日本國之三諸山故即  
營宮彼處使就而居此大三輪之神也此神之子即甘茂君  
等大三輪君等又姬蹈躡五十鈴姬命又曰事代主神化為八  
尋熊鷹通三島津檣姬或去玉櫛姬而生兒姬蹈躡五十鈴

○水本曰或云  
玉依姬五字疑  
當作分注乎

○小男奉本作  
少男三本小女

○隨下類史有  
漸字

○潮奉本作道  
○怪水本奉本  
作怪

○順發疏作須  
源三本作踊

○顯下三本有  
見字

姬命是為神日本磐余彥火火出見天皇之后也初大已貴神  
之平國也行到出雲國五十狹狹之小汀而且當飲食是時  
海上忽有人聲乃驚而求之都無所見頃時有一箇小男以白  
麩皮為舟以鷓鴣羽為衣隨潮水以浮到大已貴神即取置  
掌中而翫之則跳翳其頰乃怪其物色遣使白於天神于  
時高皇產靈尊聞之而曰吾所產兒凡有一千五百座其中  
一兒最惡不順教養自指間漏墮者必彼矣宜愛而養之此即  
少彥名命是也顯此云于都斯蹈躡此云多多羅幸魂此云佐  
枳彌多摩奇魂此云俱斯美拖磨鷓鴣此云娑娑岐

日本書紀卷第一終

日本書紀卷第二

神代下

天照大神之子正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊娶高皇產靈尊之女栲幡千千姬生天津彥彥火瓊瓊杵尊故皇祖高皇產靈尊特鍾憐愛以崇養焉遂欲立皇孫天津彥彥火瓊瓊杵尊以為葦原中國之主然彼地多有螢火光神及蠅聲邪神復有草木咸能言語故高皇產靈尊召集八十諸神而問之曰吾欲令撥平葦原中國之邪鬼當遣誰者宜也惟爾諸神勿隱所知命曰天穗日命是神之傑也可不試歟於是俯順衆言即以天穗日命往平之然此神依媚於大己貴神比及三年尙不報聞故仍遣其子大背飯三熊之大人大人此亦名武三熊之大人

○中下三本有  
○成古本作減  
○非八十下永本  
○玉本共有萬字  
○宜也古本作  
○之知下古本有  
○也古本作矣  
○比古本作次  
○山本曰亦名  
○云々八字一本  
○分注





○畏山是也四  
○世人上古本  
○有是字  
○惡以云々七  
○是字古本无  
○也字作矣  
○時上古本有  
○字下同

○植下古本有  
○立字  
○下古本有  
○之字  
○錄據原本作  
○如何古本爲  
○不照本作否  
○或曰以下應  
○爲樂下古本  
○有見矣二字

之上喪山是也世人惡以生誤死此其緣也是後高皇  
產靈尊更會諸神選當遣於葦原中國者命曰馨裂  
根裂神之馨槌男馨槌女所生之子經津  
佳也時有天石窟所住神稜威雄走神之子瓊速日神瓊速日神  
之子燖速日神燖速日神之子武甕槌神此神進日豈唯經津主  
神獨爲丈夫而吾非丈夫者哉其辭氣慷慨故以卽配經津主  
神命平葦原中國二神於是降出雲國五十田狹之小汀則  
拔十握劍倒植於地踞其鋒瑞而問大己貴神曰高皇產靈  
尊欲降皇孫君臨此地故先遣我一神驅除平定汝意  
何如當須避不時大己貴神對曰當問我子然後將報是時  
其子事代主神遊行在於出雲國三穗百美保之碯以釣魚爲  
樂或曰遊鳥爲樂故以熊野諸手船名天載使者稻背脛遣

○神三本作  
○有見矣二字  
○能信原本作  
○波多

○矣字古本无  
○當字古本无

○卒古本作平

○邪神古本爲  
○星神古本作  
○里神古本作  
○續文古本作  
○建文古本作  
○有以言二字

之而致高皇產靈於事代主神且問將報之辭時事代主  
神謂使者曰今天神有此借問之勅我父當奉避吾亦不可  
違因於海中造八重著柴籬此云踏船樁此云而避之  
使者既還報命故大己貴神則以其子之辭白於一神曰  
我怙之子既避去矣故吾亦當避如吾防禦者國內諸神必當  
同禦今我奉避誰復敢有不順者乃以平國時所杖之廣矛  
授一神曰吾以此矛卒有治功天孫若用此矛治國者  
必當平安今我當於百不足之八十限將隱去矣  
隱於是二神誅諸不順鬼神等一云二神遂誅邪神及草木  
唯星神香香背男耳故加遺倭文神建業地命者果以復命子  
則服故三神登天也倭文神此云斯國乘俄未果以復命子  
時高皇產靈尊以真床追矣覆於皇孫天津彥彥火瓊瓊杵尊

○舊本下古本皆同

○到七古本有於此二字

○以下不字三本作否

○兒下也字古本亦下古本有

使降之皇孫乃離天磐座天磐座此云阿且排象天八重雲積

威之道別道別而天降於日向襲之高千穗峯矣既而皇孫遊行

之狀也者則自穗日二上天浮橋立於浮渚在平處立於浮渚在

企爾磨梨陀毗而銜完之空國自頓丘竟國行去頓丘此云毗陀

武磨儀行去到於吾田長屋笠狹之荷矣其地有一人自號事勝

此云勝儀履國勝長狹皇孫問國在耶以不對曰此焉有國請任意遊之故

皇孫就而留佳時彼國有美人名曰鹿葦津姬亦名神吾田津姬

皇孫問此美人曰汝誰之女子耶對曰妾是天神娶大山祇

神所生兒也皇孫因而幸之即一夜而有娠皇孫未之信曰

雖復天神何能一夜之間令人有娠乎汝所懷者必非我子歟故

鹿葦津姬忿恨為作無所室入居其內而誓之曰妾所懷者非天

○舊本下古本皆同

○多一本作方

○思下古本有

○於其一本作

○皆下古本有

○將字下古本有

○雄古本作唯

孫志胤必當盡滅如實天孫志胤胤火不能害即放火燒室始起

烟未生即之鬼號火關降命是隼人等始通也火關大遊熱而

居生出之兒號彥火火出見尊次生出之兒號火明命是尾張連

凡三子矣久之天津彥彥火瓊瓊杵尊崩因葬筑紫

日向可愛可愛此之山陵

一書曰天照大神勅天稚彥曰豐葦原中國是吾兒可王之

地也然慮有殘賊強暴橫惡之神者故汝先往平之乃賜

矢鹿兒弓及天真鹿兒矢遣之天稚彥受勅來降則多娶國

神女子經武年無以報命故天照大神乃召思兼神問其不來

之狀時思兼神思而告曰宜且遣雉問之於是從彼神

謀乃使雉往候之其雉飛下居于天稚彥門前湯津柱樹之

○射之西事記  
○所傳古本作  
○此也二字古  
○一本无  
○無恙三本作  
○緣也二字古  
○本无而有矣字  
○妻于古本無  
○子字  
○穢矣三本作  
○怡然古本作  
○喜之三本作  
○喜之三本作  
○喜之三本作  
○喜之三本作  
○喜之三本作  
○喜之三本作

抄而鳴之曰天稚彥何故八年之間未有復命時有國神號天  
探女見其雉曰鳴聲惡鳥在此樹上可射之天稚彥乃取天神  
所賜天鹿兒弓天眞鹿兒矢便射之則矢達雉胸遂至天  
神所處時天神見其矢曰此昔我賜天稚彥之矢也今何  
故也來乃取矢而咒之曰若以惡心射者則天稚彥必  
當遭害若以平心射者則當無恙因還投之即其矢落下中  
于天稚彥之高胸因以立死此世人所謂返矢可畏之  
緣也時天稚彥之妻子從天降來將柩上去而於天作  
喪屋殯哭之先是天稚彥與味耜高彥根神友善故味耜高彥  
根神登天弔喪大臨焉時此神形貌自與天稚彥怡然相  
似故天稚彥妻子等見而喜之曰吾君猶在則則持衣  
帶不可排難時味耜高彥根神念曰朋友喪也故吾即來用如

○其屋古本作  
○其屋  
○應下以字古  
○本无  
○或云二字古  
○本无  
○歌之曰下古  
○本无  
○汗古本作好  
○彌古本作美  
○泥三本作規  
○四三本爲酒  
○應古本作應  
○有矣字  
○兩首古本作  
○二古

而讓死於我耶乃拔十握劍斫倒喪屋其屋墮而成山  
此則美濃國喪山是也世人愚以死者誤已此其緣  
也時味耜高彥根神光儀華艷映于三丘三谷之間故喪會  
者歌之曰或云味耜高彥根神之妹下照媛欲令衆人知  
映丘谷者是味耜高彥根神故歌之曰阿妹奈屢夜乙登多  
奈婆多廼汗奈餓勢屢多磨廼彌素磨屢廼阿奈陀磨波夜彌  
多爾輔施和施廼須阿泥素企多伽避願彌又歌之曰阿磨  
佐箇屢避奈克謎廼以和多邏素西渡以嗣箇播箇施輔智箇  
施輔智爾阿彌播利和施嗣妹盧豫爾爾豫嗣豫利據彌以嗣  
箇播箇施輔智此兩首歌辭今號夷曲既而天照大神以思兼  
神妹萬備豐秋津姬命配正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊爲妃  
命降之於葦原中國是時勝速日天忍穗耳尊立于天津橋

○也三本作矣  
○梓字一本无

○出雲下三本  
有國字而便作

○耶三本存歌  
遊古本作

○系三本傳集

○問古一本作  
時或同

○賜下古本有  
與字

而臨院之昏後地未平矣不須也頗傾因梓之國歟乃更  
遷登其陳不降之狀故天照大神復遣武甕槌神及經  
津玉神先行驅除時三神降到出雲便問大己貴神曰汝將  
此國奉天神耶以不對曰吾鬼事代主射鳥邀遊在三津之禰  
今當問以報之及遣使人訪焉對曰天神所求何不奉  
歟故大己貴神以其子之辭報乎三神乃昇天復命  
而告之曰葦原中國皆已平竟時天照大神勅曰若然者方當  
降吾兒矣且將降問皇孫已生號曰天津彥彥火瓊瓊  
杵尊時有日奏曰欲以此皇孫代降故天照大神乃賜天  
津彥彥瓊瓊杵尊八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劍三種寶物  
又以申詔祖天兒屋命忌部止祖太玉命猿女止祖天鈿女  
命鑊作玉祖有凝姥命玉作止祖靈屋命凡五部神使配傳

○曰葦原云々  
五字三本无  
○葦原三本作  
○也古本作矣

○問古本作問  
還上三本有  
都字

○也字古本无

○梓古本作時

○笑曠古本作  
咲曠

○爲之古本作  
爲如此

○大神之下三  
本有御字

○先汝行下古  
本有大神二字

焉國勅皇孫曰葦原千五百熱之瑞德國是吾子孫可王之也  
也宜爾爾皇孫就而治焉寶寶寶寶寶寶寶寶寶寶寶寶寶寶  
已而且降之問先驅者還來自海神居天以達之衢其鼻  
長七咫昔世長七尺餘當言七尋且口尻明耀眼如八咫鏡  
而貌然似赤酸醬也即遣從神往問時有八寸萬神  
皆不得自勝相問故特勅天鈿女曰汝是目勝於人者  
宜往問之天鈿女乃露其胸乳抑裳帶於臍下而笑曠向  
立是時衛神問曰天鈿女汝爲之何故耶對曰天照大神之子  
所幸道路有如此居之者誰耶敢問之衛神對曰聞天照  
大神之子今當降行故奉迎相待吾者是猿田彥大神時天鈿  
女復問曰汝將先我先行乎對曰吾先啓  
行天鈿女復問曰汝何處到耶對曰吾先啓  
行天鈿女復問曰汝何處到耶對曰吾先啓

○汝也古本作  
致矣古本作到

○因古本作曰  
其字

○于古本作茅

○山本曰是時  
本相若二字一

子則當到筑紫日向高千穗德觸之峯吾則應到伊勢之狹  
長田五十鈴川上因曰發顯我者汝也故汝可以送我而致之  
矣天鈿女還詣報狀皇孫於是脫離天磐座排分天八重雲  
稜威道別道別而天降之也果如先期皇孫則到筑紫日  
向高千穗德觸之峯其猿田彥神者則到伊勢之狹長田五  
十鈴川上即天鈿女命隨猿田彥神所乞遂以待送焉時皇孫  
勅天鈿女命汝宜以所顯神名爲姓氏焉因賜猿女君之號  
故猿女君等男女皆呼爲君此其緣也(高胸此云多歌武娜  
娑歌二頰傾也此云歌矛志)  
一書曰天神遣經津主神武甕槌神使平定葦原中國二神  
曰天有惡神名曰天津彗星亦名天香香背男請先誅此神  
然後下葦原葦原中國是時齋主神號齋之大入此神今在葦

○也字古本无

○疑下古本有  
之字

○或曰神則問  
源武靈神

○報若下古本  
有曰字

○時上古本有  
于字

○日隅宮古本  
作四隅宮

○紐作事記及  
翼作紐

○柱古本作柱  
蓋誤寫

○天鳥船古本  
作天鳥橋

○也古本作矣

東國織取之地也既而二神降到出雲五十田狹之本汀而問  
天已貴神曰汝將以此國奉天神耶以不對曰疑汝二神非  
是吾處來者故不須許也於是經津主神則還昇報  
告時高皇產靈尊乃還遣二神勅天已貴神曰今者聞汝  
所言深有其理故更條條而勅之夫汝所治顯露之事道  
是吾孫治之汝則可以治神事又汝應住天日隅宮者矣今  
當供造即以千尋栲羅結爲百八十紉其造宮之制者柱則  
高太板則廣厚又將田供佃又爲汝往來遊海之具高橋  
浮橋及天鳥船亦將供造又於天安河亦造打橋又供造百  
八十繩之白楯又當主汝祭祀者天穗日命是也於是天  
已貴神報曰大神勅教感勳如此敢不從命乎吾所治顯  
露事者皇孫當治吾將退治幽事乃薦岐神於三神曰

○是字古本无  
○或曰神以同  
○武靈神  
○仍加二字古  
○本先下古本  
○大主神與事  
○八代主神於天  
○高市云々

○疏心古本作  
疎心

○作金者下古  
本有云字

○乃使云々五  
十一字山本無  
之而古本無乃  
一字

是當代我而奉從也吾將自此避去即躬被瑞之八坂瓊而  
長隱者矣故經津主神以岐神為鄉導周流削平有逆命  
者即加斬戮歸順者仍加褒美是時歸順之首渠者大物主神  
及事代主神乃合八十萬神於天高市帥以昇天陳其誠  
款之至時高皇產靈尊勅大物主神汝若以國神為妻吾猶  
謂汝有疏心故今以吾女三穗津姬配汝為妻宜領八十  
萬神水為皇孫奉護乃使還降之即以紀伊國忌部遠祖手  
置帆負神定為作笠者彥狹知神為作盾者天目一箇神為  
作金者天日鷲神為作木綿者櫛明玉神為作玉者乃使太玉  
命以弱肩被太手襪而代御手以祭此神者始起於此矣且天  
兒屋命主神事之宗源者也故俾以太占之卜事而奉仕焉  
高皇產靈尊因勅曰吾則起樹天津神籬及天津磐境當

○與字古本无

○殿内上古本  
有同字

○高天原古本  
無高字

○此字古本无

○授上古本有  
殿字

○前古本作所  
傾丘古本作

為吾孫奉齋矣汝天兒屋命太玉命宜持天津神籬降於  
葦原中國亦為吾孫奉齋焉乃使二神陪從天忍穗耳尊  
以降之是時天照大神手持寶鏡授天忍穗耳尊而祝之  
曰吾兒視此寶鏡當猶視吾可與同床共殿以為齋  
鏡復勅天兒屋命太玉命惟爾二神亦同侍殿内善  
為防護又勅曰以吾高天原所御齋庭之穗亦當御於吾  
兒則以高皇產靈尊之女號萬幡姬配天忍穗耳尊為妃  
降之故時居於虛天而生兒號天津彥火瓊瓊杵尊因欲以  
此皇孫代親而降故以天兒屋命太玉命及諸部神等悉  
皆相授日服御之物依前授然後天忍穗耳尊復還於天  
故天津彥火瓊瓊杵尊降於日向穗日高千穗之峯而齋完  
胸副國自傾丘竟國行去立於浮渚在平地乃召國主事勝

○水木曰亦名木花開耶姬七字經當分注小

○欲古本作故

○身上古本有

○戀上古本有

○天下古本有

○移落上古本有矣字

○衰去古本作

○短折古本作

○短命而下無之字別有折木二字

國勝長狹而訪之對曰是有國也取捨隨勅時皇孫因  
立官殿是焉遊息後遊幸海濱見一美人皇孫問曰汝是  
誰之子耶對曰妾是大山祇神之子名神吾田鹿葦津姬亦  
名木花開耶姬因白亦吾姊磐長姬在皇孫曰吾欲以  
汝為妻如之何對曰妾父大山祇神在請以垂問皇孫因  
謂大山祇神曰吾見汝之女子欲以為妻於是大山祇神乃  
使二女持百机飲食奉進時皇孫謂姊為醜不御而罷  
妹有國色引而幸之則一夜有身故磐長姬大慙而詛之曰  
假使天孫不斤妾而御者生兒永壽有如磐若之常在令  
既不然唯弟獨見御故其生兒必如木華之移落云磐長姬  
恥恨而睡泣之曰顯見蒼生者如木華之俄遷轉當衰去此世  
人短折之緣也是後神吾田鹿葦津姬見皇孫曰妾已孕

○甚古本作其

○伊幡毗下古本有奴志二字

○次古本作以

○古本曰成竹林若故就彼地向日竹屋私在神向四圍于時神吾田鹿葦津姬以卜定田號名田云々

天孫之子不可私以淫穢也皇孫曰雖復天神之子如何  
使天孫子抑非吾之兒歟木華開耶姬甚以慙恨乃作無戶室  
而誓之曰吾所娠是若他神之子者必不幸矣是實天孫之子  
者必當全生則入其室中以火焚室子時燭初起時共生兒  
號火酸芹命次火盛時生兒號火明命次生兒號彥火火出  
見尊亦號火折尊齋主此云伊幡毗顯露此云阿羅幡貳齋庭  
此云踰貳波  
一書曰初火燄明時生兒火明命次火炎盛時生兒火進命又  
曰火酸芹命次避火炎時生兒火折彥火火出見尊凡此三子  
火不能害及母亦無所少損時以竹刀截其兒臍其所棄  
竹刀終成竹林故號彼地曰竹屋時神吾田鹿葦津姬以下定  
田號曰狹名田以其田稻釀天甜酒嘗之又用淳浪田稻為飯



嘗之曰高皇產靈尊以眞床覆衾襲天津彦國光彦火瓊瓊杵尊則引開天磐戶排分天八重雲以奉降之子時大伴連遠祖天忍日命帥來目部遠祖天穗津大來目背負天磐瓊臂著稜威高靴手提天梃弓天羽羽矢及副持八目鳴鏑又帶頭槌劍而立天孫之前遊行降來到於日向襲之高千穗穗日二上峯天浮橋而立於浮渚在之平地齋完空國自頓丘寬國行去到於吾田長屋笠狹之御碕時彼處有一神名曰事勝國勝長狹故天孫問其神曰國在耶對曰在也因曰隨勅奉矣故天孫畱住彼處其事勝國勝神者是伊弉諾尊之子也亦名鹽土老翁  
 書曰天孫幸大山祇神之女子吾田鹿葦津姬則一夜有身

○立字古本元

○也古本作矣  
○因曰二字古本  
○作白一字

○是時古本無時字  
 ○剛下古本有時字  
 ○問喜古本作不喜之  
 ○乎古本作之  
 ○固古本作因  
 ○誦誥古本作誦雄下同  
 ○自喜古本作坐耶古本作在耶

遂生四子故吾田鹿葦津姬抱子而來進曰天神之子寧可  
 以私養乎故告狀知聞是時天孫見其子等嘲之曰妍哉  
 吾皇子者聞喜而生之歟故吾田鹿葦津姬乃愠之曰何爲  
 嘲妾乎天孫曰心之疑矣故嘲之何則雖復天神之子豈  
 能一夜之間使人有身者哉固非我子矣是以吾田鹿葦津姬  
 益恨作無戶室入居其內誓之曰妾所娠若非天神之胤者  
 必自是若天神之胤者無所害則放火焚室其火初明時  
 誦誥出見自言吾是天神之子名火明命吾父何處坐耶次  
 火盛時誦誥出見亦言吾是天神之子名火進命吾父及兄何  
 處在耶次火炎衰時誦誥出見亦言吾是天神之子名火折尊  
 吾父及兄等何處在耶次避火熱時誦誥出見亦言吾是天  
 神之子名彦火火出見尊吾父及兄等何處在耶然後母吾田

○曰下妾字古  
○曰下妾字古  
○曰下妾字古  
○曰下妾字古  
○曰下妾字古  
○曰下妾字古  
○曰下妾字古  
○曰下妾字古  
○曰下妾字古  
○曰下妾字古

○曰下妾字古  
○曰下妾字古  
○曰下妾字古  
○曰下妾字古  
○曰下妾字古  
○曰下妾字古  
○曰下妾字古  
○曰下妾字古  
○曰下妾字古  
○曰下妾字古

鹿葦津姬自火爐中出來就而稱之曰妾所生兒及妾身自當  
火難無所少損天孫豈見之乎報曰我知本是吾兒但一夜而  
有身慮有疑者欲使乘人皆知是吾兒并亦天神能令一夜  
有娠亦欲明汝有靈異之威乎等復有超倫之氣故有  
前日之嘲辭也〔梳此云波葦〕音之移反〔頭槌此云箇步豆智〕  
〔老翁此云鳥賦〕  
一書曰天忍穗根尊娶高皇產靈尊女子栲幡千千姬萬幡姬  
命亦云高皇產靈尊兒火之戶幡姬兒千千姬命而生兒天香  
明命次生天津彥根火瓊瓊杵根尊其天火明命兒天香山  
是尾張連等遠祖也及至奉降皇孫火瓊瓊杵尊於葦原  
中國也高皇產靈尊勅勅入半諸神曰葦原中國者磐根木  
株草葉猶能言語夜者若燦燦而喧響之晝者如暈月蠅而沸

○無名雄雌古  
○無名雄雌古  
○無名雄雌古  
○無名雄雌古  
○無名雄雌古  
○無名雄雌古  
○無名雄雌古  
○無名雄雌古  
○無名雄雌古  
○無名雄雌古

○無名雄雌古  
○無名雄雌古  
○無名雄雌古  
○無名雄雌古  
○無名雄雌古  
○無名雄雌古  
○無名雄雌古  
○無名雄雌古  
○無名雄雌古  
○無名雄雌古

騰之云云時高皇產靈尊勅曰昔遺天稚彥於葦原中國至  
今所以久不來者蓋是國神有強禦之者乃遣無名雄雌往候  
之此雌降來因見粟田豆田則留而不返此世所謂雌賴使之  
緣也故復遣無名雌雌此鳥下來為天稚彥所射中其矢而  
止報云云是時高皇產靈尊乃用眞床覆衾髮皇孫天  
津彥根火瓊瓊杵根尊而排披天八重雲以奉降故稱此神  
曰天國饒石彥火瓊瓊杵尊于時降到之處者呼曰日向襲之  
高千穗添山峯矣及其遊行之時也云云到于吾田笠狹之  
御碕遂登長屋之竹島乃巡覽其地者彼有人焉名曰事勝  
國勝長狹天孫因問之曰此誰國歟對曰是長狹所住之國也  
然今乃奉上天孫矣天孫又問曰其於秀起浪繼之上起八  
尋殿而手玉玲瓏織紅之少女者是誰也子女耶答曰大山

○大皮少下水  
本有女字

○皇孫古本作  
皇御孫  
○古本御歌爲  
別條

○古本爲天萬  
榜幡千千姬

祇神之女等大號馨長姬少號木花開耶姬亦號豐吾田津姬  
 云云皇孫因幸豐吾田津姬則一夜而有身皇孫疑之云云遂  
 生火酢芹命次生火折尊亦號彥火火出見尊母誓已驗方  
 知實是皇孫之胤然豐吾田津姬恨皇孫不與共言皇孫憂  
 之乃爲歌之曰憶企都茂幡陸爾幡譽辰耐母佐禰耐據茂阿  
 黨播怒介茂譽播磐都智耐理譽標火此云褒倍(喧響此云淤  
 等娜比)五月蠅此云左魔陪(添山此云曾褒里能耶麻(秀起此  
 云左岐陀豆履)  
 一書曰高皇產靈尊之女天萬榜幡千幡姬  
 一云高皇產靈尊兒萬幡姬兒玉依姬命此神爲天忍骨命  
 妃生兒天之杵火火置瀨尊  
 一云勝速日命兒天大耳尊此神娶丹鳥姬生兒火瓊瓊杵尊

○神高皇產靈  
一本無高字

○燒石此云爾  
故伊新靈此  
云由其油此  
豆麻以上二  
五字古本有  
魂杵尊下  
○火々出見尊  
下古本有矣字

○謂古本作

○釣字古本无

一云神高皇產靈尊之女榜幡千幡姬生兒火瓊瓊杵尊  
 一云天杵瀨命娶吾田津姬生兒火明命次火夜織命次彥火  
 火出見尊  
 一書曰正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊娶高皇產靈尊之女天  
 萬榜幡千幡姬爲妃而生兒號天照國照彥火明命是尾張連  
 等遠祖也次天饒石國饒石天津彥火瓊瓊杵尊此神娶大山  
 祇神女子木花開耶姬命爲妃而生兒號火酢芹命次彥火火  
 出見尊  
 兄火開降命自有海幸此云弟彥火火出見尊自有山幸  
 始兄弟二人相謂曰試欲易幸遂相易之各不得其利  
 兄悔之乃還弟弓箭而乞已釣鈎弟時既失見鈎無由訪  
 覓故別作新鈎與兄兄不肯受而責其故鈎弟患之即以

○發字古本无

○内古本作納

○也古本作矣

○海神下照本有先陰者祝之是天神御孫矣十一字

其横刃鍛作新鉤盛一箕而與之兄忿之曰非我故鉤雖多榮之取益復急責故彦火出見尊憂苦甚深行吟海畔時逢鹽土老翁老翁問曰何故在此愁乎對以事之本末老翁曰勿復憂吾當爲汝計之乃作無目籠內彦火出見尊於籠中沈之于海即自然有可怜小汀可憐此云于麻於是棄籠遊行忽至海神之宮其宮也雉堞整頓臺宇玲瓏門前有一井井上有一湯津杜樹枝葉扶疏時彦火出見尊就其樹下徙侍彷彿良久有一美人排闥而出遂以玉鏡來當汲水因舉目視之乃驚而還入白其父母曰有一希客者在門前樹下海神於是鋪設八重席薦以延內之坐定因問其來意時彦火出見尊對以情之委曲海神乃集太小之魚遍問之僉曰不識唯赤女赤女名也比有口疾而不來固

○時古本作特太息之

○當產下古本有時字

○危困古本作困厄

召之探其口者果得矢鉤已而彦火出見尊因娶海神女豐玉姬仍留住海宮已經三年彼處離復安樂猶有憶鄉之情故時復太息豐玉姬聞之謂其父曰天孫懷然歎歎蓋懷土之憂乎海神乃延彦火出見尊從容語曰天孫若欲還鄉者吾當奉送便授所得釣鉤因誨之曰以此鉤與汝兄時則陰呼此鉤曰貧鉤然後與之復授潮滿瓊及潮涸瓊而誨之曰潰潮滿瓊者則潮忽滿以此沒潮汝兄若兄悔而祈者還潰潮涸瓊則潮自涸以此救之如此逼惱則汝兄自伏及將歸去豐玉姬謂天孫曰妾已娠矣當產不久妾必以風濤急峻之日出到海濱請爲我作產室相待矣彦火出見尊曰還官一遵海神之教時兄火闌降命既被危困乃自伏罪曰從今以後吾將爲汝俳優之民請施恩活於

○遠字古本先  
 ○蓋時下古本  
 ○作相天御孫曰  
 ○請安座時幸而  
 ○孫猶不能忍云  
 ○云登玉姬古本  
 ○作登玉姬下同  
 ○相字古本有  
 ○相字下古本有  
 ○作天相與海神  
 ○期可永安今既  
 ○結觀之將以何  
 ○永欲令無隔絕  
 ○妻誓言乃以草  
 ○嬰兒曰云々  
 ○曰矣治天下六  
 ○十三萬七千八  
 ○百九十二歲  
 ○樓下古本有  
 ○之瀛三宇

是隨其所包遂赦之其火闌降命即吾田君小橋等之本祖也後  
 豐玉姬果如前期將其女弟玉依姬直冒風波來到海邊逮  
 臨產時請曰妾產時幸勿以看之天孫猶不能忍竊往視  
 之豐玉姬方產化為龍而甚慙之曰如有不辱我者則使  
 海陸相通永無隔絕今既辱之將何以結親昵之情乎乃以  
 草屨兒棄之海邊閉海途而徑去矣故因以名兒曰彥波瀲  
 武鸕鷀草葺不合尊後久之彥火火出見尊崩葬日向高  
 屋山上陵

一書曰兄火酢芹命能得海幸弟彥火火出見尊能得山幸  
 時兄弟欲互易其幸故兄持弟之幸弓入山覓獸終不  
 見獸之乾迹弟持兄之幸鉤入海釣魚殊無所獲遂失其  
 鉤是時兄還弟弓矢而責已鉤弟患之乃以所帶橫刀作

○壯麗古本作  
 ○美麗一本作  
 ○杜樹一本作  
 ○桂樹一本作  
 ○玉璽古本作

鉤盛一箕與兄兄不受曰猶欲得吾之幸鉤於是彥火火出  
 見尊不知所求但有憂吟乃行至海邊彷徨嗟嘆時有  
 長老忽然而至自稱鹽土老翁乃問之曰君是誰者何故患  
 於此處乎彥火火出見尊具言其事老翁即取囊中玄  
 櫛投地則化成五百箇竹原因取其竹作大目龜籠內火火  
 出見尊於籠中投之于海  
 一云以無目堅間為浮木以細繩繫著火火出見尊而沈  
 之所謂堅間是今之竹籠也于時海底自有可伶小汀乃尋  
 汀而進忽到海神豐玉彥之宮其宮也城闕崇華樓臺  
 壯麗門外有井井傍有杜樹乃就樹下立之良久有  
 一美人容貌絕世侍者羣從自內而出將以玉壺汲玉水  
 仰見火火出見尊便以驚遽而白其父神曰門前井邊樹

○若古本作君  
○虛空下古本  
有降字

○豐玉彦古本  
作豐玉妃

○昔下是字古  
本无

○服古本作年

○白下一本有  
其字

○赤女下水本  
有或云亦調四  
字

○教古本作教

下有六貴客骨法非常若從天降者當有天垢從地來者當有地垢實是妙美之虛空彥者歟

云豐玉姬之侍者以玉瓶汲水終不能滿俯視井中則倒映人笑之顏因以仰觀有一麗神倚於杜樹故還入

白其王於是豐玉彥遣人問曰客是誰者何以至此火出見尊對曰吾是天神之孫也乃遂言來意時海神迎

拜延入慰慰奉慰因以女豐玉姬妻之故留住海宮已經三載是後火出見尊數有歎息豐玉姬問曰天孫豈欲

還故鄉歟對曰然豐玉姬即白父神曰在此貴客意望欲還上國海神於是總集海魚竟問其鈎有一魚對

曰赤女久有口疾(或云赤鯛)疑是之吞乎故即召赤女見其口者鈎猶在白便得之乃以授彥火出見尊因教之曰

以鈎與汝人兄時則可詛言貧窮之本飢饉之始困苦之

根而後與之受汝兄涉海時吾必起迅風洪濤令其沒溺辛苦矣於是乘火出見尊於大鰐以送致本鄉先是且

別時豐玉姬從容語曰妾已有身矣當以風濤壯壯日出到海邊請為我造產屋以待之是後豐玉姬果如其言來

至謂火出見尊曰妾今夜當產請勿臨之火出見尊不聽猶以櫛燃火視之時豐玉姬化為八尋大熊鰐匍匐透

蛇遂以見辱為恨則徑歸海鄉置其女弟玉依姬持養兒焉所以兒名稱彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊者以彼海

濱產屋全用鸕鷀羽為草葺之而葺未合時兒即生焉故因以名焉(出國此云羽播豆短爾)

一書曰問前有手好非赤上有百枝椹樹故彥火出見尊跳

○全古本作令  
○而古本作即  
○生古本作虛  
○名古本作有  
○字而無焉字

○持之上本  
有相字

○產屋古本作  
產室下同

○壯古本作  
作日

○鰐水本作鰐  
下同

○聖古本作隨

○設上古本有數字

○水本曰疑疏亦云口女有口疾七字小書分注據下文義當不來而分注亦云赤女有口疾依蓋不敢輕改今古本無對字

昇其樹而立之于時海神之女豐玉姬手持玉鏡來將汲水正見人影在於井中乃仰視之驚而墜鏡既破碎不顧而還入謂父母曰妾見一人在於井邊樹上顏色甚美容貌且閑殆非常之人者也時父神聞而奇之乃設八重席迎入坐定因問來意對以情之委曲時海神便起憐心盡召鱈廣鱈狹狹而問之皆曰不知但赤女有口疾不來亦云口女有口疾即急召至探其口者所失之針鉤立得於是海神制曰爾口女從今以往不得吞餌又不得預天孫之饌即以口女魚所以不進御者此其緣也及至彥火火出見尊將歸之時海神自言今者天神之孫辱臨吾處中心欣處何日忘之乃以思則潮溢之瓊思則涸涸之瓊副其鉤而奉進之曰皇孫雖隔八重之隅時復相憶而勿棄置也因致之

○蓋此云神傳之澤當作總漢書曰家靈秘傳師古曰魂音薄樂無次也

○狗人下古本有乎字○瀾復上當補潮字

曰以此鉤與汝兄時則稱貧鉤減鉤落薄鉤言訖以後手投棄與之勿以向授若兄起忿怒有賊害之心者則出潮溢瓊以漂溺之若已至危苦求惑者則出潮涸瓊以救之如此逼惱自當臣伏時彥火火出見尊受彼瓊鉤歸來本官一依海神之教先以其鉤與兄兄怒不受故弟出潮溢瓊則潮大溢而兄自沒溺因請之曰吾當事汝為奴僕願垂救活弟出潮涸瓊則潮自涸而兄還平復已而兄改前言曰吾是汝兄如何為人兄而事弟耶弟時出潮溢瓊兄見之走登高山則潮亦沒山兄緣高樹則潮亦沒樹兄既窮途無所逃去乃伏罪曰吾已過矣從今以往吾子孫八十連屬恆當為汝伴人

一云狗人請哀之弟還出潮涸則潮自息於是兄知弟

○海中上風本  
玉本共有於字

有神靈天孫以伏事其弟是以火酢芹命苗裔諸集人等至  
 今不離天皇帝宮牆之傍代吠狗而奉事者也世人不債失針此  
 其緣也  
 一書曰况火酢芹命能得海幸故號海幸彦火火出見尊  
 能得山幸故號山幸彦見則每有風雨輒失其利弟則雖  
 逢風雨其幸不惑時兄謂弟曰吾試欲與汝換幸弟許  
 諾因易之時兄取弟弓矢入山獵獸弟取兄釣鉤入海釣魚俱  
 不得利空手來歸兄即還弟弓矢而責已釣鉤時弟已失鉤於  
 海中無因訪獲故別作新鉤數千與之兄怒不受急責故鉤  
 云云是時弟往海濱促徊愁吟時有川雁嬰繭因厄即起憐  
 心解而放去須臾有鹽上老翁來乃作無目堅間小船載火  
 火出見尊堆放海中則自然沈去忽有可拾御路故尋路而往

○按古本作按

自至海神之宮是時海神自迎延入乃鋪設海鹽皮八重使  
 坐其上兼設饌百机以盡主人之禮因從容問曰天神之  
 孫何以辱臨乎  
 云頃吾兒來語曰天孫憂居海濱未審虛實蓋有之  
 乎彦火火出見尊具中事之本末因留息焉海神則以其子  
 豐玉姬妻之遂纏綿篤愛已經三年及至將歸海神乃召  
 鯛女探其口者即得鉤焉於是進此鉤于彦火火出見尊  
 因奉教之曰以此與汝兄時乃可稱曰大鉤踉蹌鉤貧鉤癡  
 朕鉤言訖則可以後手授賜已而召集鰐魚問之曰天神之  
 孫今當還去爾等幾日之內將作以奉致時諸鰐魚各隨其  
 長短定其日數中有一鰐魚自言一日之內則當致焉故即  
 遣一鰐魚以奉送焉復進潮滿瓊潮洄瓊二種寶物仍



○一書下當補海字  
○弟時以下十二字重疏在其後上可從

教用璣之法又教曰兄作高田者汝可作海田兄作海田者汝可作高田海神盡誠奉助如此矣時彥火火出見尊既歸來一遵神教依而行之其後火酢芹命日以襪襪而憂之曰吾已貧矣乃歸伏於弟弟時出潮滿瓊即兄舉手溺因還出潮涸瓊則休而平復先是豐玉姬謂天孫曰妾已有娠也天孫之胤豈可產於海中乎故當產時必就君處如為我造屋於海邊以相待者是所望也故彥火火出見尊已還鄉即以鷓鴣之羽葺為產屋屋竟末及合豐玉姬自馭大龜將女弟玉依姬光海來到時孕月已滿產期方急由此不待葺合徑入居焉已而從容謂天孫曰妾方產請勿臨之天孫心怪其言竊視之則化為八尋大鰐而知天孫視其私屏深懷慙慙恨既見生之後天孫就而問曰

○湯坐一本作湯人

○命寄一本為寄命

○山古一本作海海亦作山

見名何稱者當可乎對曰宜號彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊言訖乃涉海徑去于時彥火火出見尊乃歌之曰既企都鄧利鞆茂豆旬志磨爾和我謂禰志伊茂播利素邏珥譽能據鄧馭鄧母亦云彥火火出見尊取婦人為乳母湯母及飯嚼湯坐凡諸部備行以奉養焉于時權用他姬婦以乳養皇子焉此世取乳母養兒之緣也是後豐玉姬聞其兒端正心甚憐重欲復歸養於義不可故遣女弟玉依姬以來養者也于時豐玉姬命寄玉依姬而奉報歌曰阿鞆磨廼比訶利播阿利登比鄧播伊珥耐企珥我譽贈比志多輔妬旬阿利計利凡此贈答二首號曰舉歌海鹽此云美知跟踉之鉤此云須須能美賦二癡騷鉤此云于樓該賦一書曰况火酢芹命得山幸利弟火折尊得海幸利云云弟

愁吟在海濱時遇鹽土老翁老翁問曰何故愁若此乎火折  
 尊對曰云云老翁曰勿復憂吾將計之計曰海神所乘駿  
 馬者八尋鯨也是堅其鱗背而在橋之小戶吾當與彼者共  
 策乃將火折尊共往而見之是時鯨魚策之曰吾者八日以  
 後亦致天孫於海宮唯我王駿馬八尋鯨魚是當一日  
 之內必奉致焉故今我歸而使彼出來宜乘彼入海入海之時  
 海中自有可伶小汀隨其汀而進者必至我王之宮宮門  
 井上當有湯津杜樹宜就其樹上而居之言訖即入海去矣  
 故天孫隨鯨所引言留居相待已八日矣久之方有一尋鯨來  
 因乘而入海每道前鯨之教時有豐玉姬侍者持玉鏡當  
 汲井水見人影在水底酌取之不得因以仰見天孫即入告其  
 至因吾請我玉獨能絕麗今有客彌復遠勝下海神

○赤女即云々  
 十二字本亦分  
 注延住本亦同

○風招云々五  
 字本亦分注

○卷下一本有  
 海字

聞之曰試以察之乃設三床請入於是天孫於邊床則  
 拭其兩足於中床則據其兩手於內床則寬坐於真床履  
 袞之坐海神見之乃知是天神之孫也益加崇敬云云天孫  
 神召赤女曰女問之時曰女自日出鉤以奉焉赤女即赤鯛  
 也曰女即鱈魚也時海神授鉤彥火火出見尊因教述曰還  
 兒鉤時天孫則當言汝生子乎連屬之裏貧鉤狹狹貧鉤  
 言訖三下睡與之又兒入海鉤時天孫宜在海濱以作風招  
 風招即噴也如此則吾起瀾風瀾風以奔波瀾瀾水折尊歸  
 來具道神教至乃見鉤之日第居海濱而噴之時  
 迅風忽起兒則瀾若無由可生便還請第曰汝兒居  
 海原必有善術願以教之善法我者吾生兒八十連屬  
 不離汝之指邊當為作傳之民也於是神傳已傳而風亦還

息故克知弟德欲自伏辜而弟有愠色不與共言於是兄  
 著懷身以積塗掌塗面告其弟曰吾汚身如此此永  
 爲汝僕優者乃舉足踏行學其湯苦之狀初潮漬足時則爲足  
 占至膝時則舉足至股時則走廻至腰時則捫腰至腋則置  
 手於臍至頸時則舉手颯掌自蔽及今會無廢絕先是豐玉  
 姬出來當產時皇孫曰云云皇孫不從從豐玉姬夫  
 恨之曰不用言吾言令我屈辱故自今以往妾與奴婢至君  
 處者勿復放還君奴婢至妾處者亦勿復還遂以眞床覆衾及  
 草覆其兒置之波瀲即入海去矣此海陸不相通之緣也  
 矣云云置冠於波瀲者非也豐玉姬命自抱而去久之曰天孫  
 之胤不宜置此海中乃使玉依姬持之送出海焉初豐玉姬  
 別去時恨言既切故火折尊知其不可復會乃有贈歌已

見生(漢)連屬此云野素豆(豆)企(飄)掌此云陀毗盧(箇)須也  
 彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊以其姨玉依姬爲妃生彦五瀨命  
 次稻飯命次三毛入野命次神日本磐余彦尊凡生四男久  
 之彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊崩於西州之宮因葬日向  
 吾平山上陵

一書曰先生彦五瀨命次稻飯命次三毛入野命次狹野尊亦  
 號神日本磐余彦尊所稱狹野者是年少之號也後撥平  
 天下奄有八洲故復加號曰神日本磐余彦尊  
 一書曰先生五瀨命次三毛野命次稻飯命次磐余彦尊亦號  
 神日本磐余彦火火出見尊  
 一書曰先生彦五瀨命次稻飯命次神日本磐余彦火火出見  
 尊次雅三毛野命次火火出見尊

一書曰先生彥五瀨命次磐余彥火火出見尊次稻飯命次三  
 毛入野命次... 神武天皇... 磐余彥... 火火出見... 尊次... 稻飯命... 次三...  
 日本書紀卷第三... 神武天皇... 磐余彥... 火火出見... 尊次... 稻飯命... 次三...

日本書紀卷第三

神日本磐余彥天皇 神武天皇

神日本磐余彥天皇(譯)彥火火見出彥波瀲武鸕草葺不合

尊第四子也母曰玉依姬海童之小女也天皇生而明達意確

如也年十五立為太子長而娶日向國吾田邑吾平津

媛為妃生手研耳命及年四十五歲謂諸兄及子等曰昔

我天神高皇產靈尊大日靈尊舉此豐葦原瑞穗國而授我天

祖彥火瓊杵尊於是火瓊瓊杵尊關天開披雲路駈山蹕以

辰止是時運屬鴻荒時鍾草昧故蒙以養正治此西偏皇祖

皇考乃神乃聖積慶重暉多歷年所自天祖降跡以逮于

今一百七十九萬三千四百七十餘歲而遼遼之地猶未霑

○小女三本作  
 ○太子上一本  
 ○手研耳命  
 ○熱本有研耳命  
 ○三宇  
 ○火瓊瓊杵上  
 ○熱本有彥字  
 ○天開水本作  
 ○天開水本作  
 ○山蹕舊事紀  
 ○作仙蹕  
 ○遼遼三本作  
 ○遼遼三本作

○飛三本作而

於王澤遂使邑有君村有長各自分疆用相凌蹙抑又聞於  
 鹽主老翁曰東有美地青山四周其中亦有乘天磐船飛降者余  
 謂彼地必當足以恢弘天業光宅天下蓋六合之中心乎厥飛降  
 者謂是饒速日歟何不就而都之乎諸皇子對曰理實灼然我  
 亦恆以為念宜早行之是年也太歲甲寅其年冬十月丁巳朔  
 辛酉天皇親帥諸皇子舟師東征至速吸之門時有一漁  
 人乘艇而至天皇詔之因問曰汝誰也對曰臣是國神名曰珍彥  
 釣魚於曲浦聞天神子來故即奉迎又問之曰汝能為我  
 導耶對曰導之矣天皇勅授漁人椎楫末命執而牽納  
 於皇舟以為海導者乃特賜名為椎根津彥此即倭直部  
 始祖也行至筑紫國菟狹也此云宇佐時有菟狹國造祖號曰  
 菟狹津彥弟津彥媛於菟狹川上造一柱騰宮而奉饗焉一柱  
 騰宮

○直部集解作直等下同

○者地名也四古本无

○昔一本作昔

此云阿斯都時勅以菟狹津彥賜妻之於侍臣天種子命  
 天種子命是也臣氏之遠祖也十有一月丙戌朔甲午天皇至  
 筑紫國岡水門十有二月丙辰朔壬午至安藝國居于埃宮  
 乙卯年春三月甲寅朔己未徙入吉備國起行宮以居之是日  
 高島宮積三年間備舟楫蓄兵食將欲以一舉而平天下也  
 戊午年春三月丁酉朔丁未皇師遂東舳艦相接方到難波  
 之碕會有大潮太急因以名為浪速國亦曰浪華今謂難波  
 訛許余磨國二月丁卯朔丙子溯流而上徑至河內國草香  
 邑青雲白肩之津夏四月丙申朔申辰皇師勒兵步趣龍田  
 而其路狹峻人不得並行乃還更欲東踰膽駒山而入中洲時  
 長隨彥聞之因夫天神子等所以來者必將奪我國則盡起屬  
 兵徵之於孔舍衛坂與之會戰有流失中五瀨命脰脛皇師

○龍下熟本有也字

○白肩集解作白肩

○孔舍衛一本作孔舍衛一衛の說にて或説サカナリ或説

にクサカミ  
は四我表は草  
もて知らるる  
古事記に日下  
之高津さあり  
○胎原古本無  
展字

○盾三本作折

○免無本作脫

不能進戰天皇憂之為運神策於冲於日今我是日神子  
孫而向日征虜此逆天道也不若退還示弱禮祭神祇  
背負日神之威隨影壓躡如此則曾不血刃虜必自  
敗矣命曰然於是令軍中曰且停勿復進乃引軍還虜亦  
不敢逼却至草香津植盾而為雄詰焉雄詰此云因改號其津  
曰盾津今云藤津訛也初乳舍衛之戰有人隱於大樹而得  
免難仍指其樹回恩如母時人因號其地曰母木邑今云餘  
間磯奇訛也五月丙寅朔癸酉軍至茅渟山城水門亦名山  
茅渟時五瀨命矢瘡痛甚乃擲劍而雄詰之曰此云  
此云將不報而死耶時大因號其處國難亦因進到牙紀伊國窟山而

○神邑下古本  
有而字

○秀字古本无

○由是下三本  
有因字

○高倉下一本  
有下字下同

五瀨命薨于軍因葬龜山六月乙未朔丁巳軍至名草邑則  
誅名草野神者有呼此遂越狹野到熊野神邑且登天磐盾  
仍引軍漸進海中卒遇暴風皇舟漂蕩時稻飯命乃歎曰嗟  
乎吾祖則天神母則海神如何厄我於陸復厄我於海乎言訖  
乃拔劍入海化為鋤持神三毛入野命亦恨之曰我母及姨並是  
海神何為起波瀾以灌溺乎則蹈浪秀而往乎常世鄉矣天皇  
獨與皇子手研耳命帥軍而進至熊野荒坂津亦名丹因誅丹  
敷戶吟者時神吐毒氣人物咸瘵由是皇軍不能復振時彼處有  
人號曰熊野高倉下忽夜夢天照大神謂武甕雷神曰夫葦原中  
國猶聞喧擾之響焉聞喧擾之響焉此云宜汝更往而征之武甕雷  
神對曰雖予不行而下乎平國之劍則國將自平矣天照大神  
曰諾此云時武甕雷神登謂高倉曰予劍號曰顯靈此云

○一本無頭字

布居能今當置汝庫裏取而獻之天孫高倉曰唯唯而寤之  
明旦依夢中教開庫視之果有落劍倒立於庫底板即取以  
進之于時天皇適寐忽然而寤之曰予何長眠若此乎尋而中  
毒士卒悉復醒起既而皇師欲趣中洲而山中嶮絕無復可  
行之路乃摸違不知其所跋涉時夜夢天照大神訓于天皇曰  
朕今遣頭八咫鳥宜以為導者果有頭八咫鳥自空翔降天  
皇曰此鳥之來自味祥夢大哉赫矣我皇祖天照大神欲以助  
成基業乎是時大伴氏之遠祖日臣命師大來目督將元戎  
躡山啓行乃尋鳥所向仰視而進之遂達于菟田下縣因號其  
至之處曰菟田穿邑此云于時被譽日臣命曰汝忠  
爾且勇加能有導之功是以改汝名為道臣秋八月甲午朔乙未  
天皇使徵兄猾及弟猾者猾此登時兄猾不來弟猾即詣至因拜軍門而告之曰臣兄  
誤如加爾猾之為遠狀也聞天孫且到即起兵將襲望懸皇師亦  
威懼不敢敵乃潛伏其兵權作紙官而殿內施機欲因讀  
變以作難願知此詐善為之備夫皇師遣道臣命察其逆  
狀時道臣命審知有賊害之心而大怒詰噴之曰虜及爾所造屋  
爾自居之此云因案劍鸞弓逼今催入兄猾獲罪兄  
於天事無所辭乃自蹈機而壓死時陳其屍而斬之流血沒踝  
故號其地曰菟田血原已而弟猾大設牛酒以勞饗皇師焉天  
皇以其酒快班賜軍卒乃為御謠之曰此云于僕能多  
伽機現辭藝和奈破藤和能未鬼夜辭藝破佐夜羅焉伊殊區波  
辭區妮羅佐夜難圍奈淵餓那居波佐麼多智曾麼能未廼那鷄  
句鳩居氣辭被惠爾宇敵奈利餓那居波佐磨伊智佐介幾未廼

○一本無元字

○一本無元字

此登時兄猾不來弟猾即詣至因拜軍門而告之曰臣兄  
猾之為遠狀也聞天孫且到即起兵將襲望懸皇師亦  
威懼不敢敵乃潛伏其兵權作紙官而殿內施機欲因讀  
變以作難願知此詐善為之備夫皇師遣道臣命察其逆  
狀時道臣命審知有賊害之心而大怒詰噴之曰虜及爾所造屋  
爾自居之此云因案劍鸞弓逼今催入兄猾獲罪兄  
於天事無所辭乃自蹈機而壓死時陳其屍而斬之流血沒踝  
故號其地曰菟田血原已而弟猾大設牛酒以勞饗皇師焉天  
皇以其酒快班賜軍卒乃為御謠之曰此云于僕能多  
伽機現辭藝和奈破藤和能未鬼夜辭藝破佐夜羅焉伊殊區波  
辭區妮羅佐夜難圍奈淵餓那居波佐麼多智曾麼能未廼那鷄  
句鳩居氣辭被惠爾宇敵奈利餓那居波佐磨伊智佐介幾未廼

○首部樂解作  
首等

○國撰部  
紀作國撰部

於朋雞句鳩居氣懷被惠爾是謂來目歌吟樂府奏此歌者猶  
 有手量大小及音聲巨細此古之遺式也是後天皇欲省言  
 野之地為自菟田身邑親率輕兵巡幸焉至吉野時有人出  
 自井中光而有尾天皇問之曰汝何人對曰臣是國神名為井光  
 此則吉野首部始祖也更少進亦有尾而披磐石而出者天皇  
 問之曰汝何人對曰臣是磐排別之子排別此則吉野國  
 撰部始祖也及緣水西行亦有作梁取魚者梁此則吉野國  
 國臣是苞直播之子苞直播此則阿太養鷓部始祖也九月  
 甲子朔戊辰天皇陟彼菟田高倉山之巔瞻望域中時國見  
 嶽上則有八十梟帥多稱屢又於女坂置女軍男坂置男軍墨  
 坂置妹其女坂男坂墨坂之號由此而起也復有兒磯城軍布  
 滿於磐余邑賊虜所據皆是要害之地故道路絕塞無處可

○赤銅舊事  
作赤銅

○推根津  
本有使字解本  
作令字

○若古本作款

通天皇惡之是夜自祈而寢夢有天神訓之曰宜取天香山社  
 申主香山此以造天平倉八十枚并造嚴盆而敬祭  
 天神地祇嚴盆此亦為嚴咒詛如此則虜自平伏嚴咒  
 云怡途能天皇祇承夢訓依以將行時弟猾又奏曰倭  
 國磯城邑有磯城八十梟帥又高尾張邑城本云有赤銅八十  
 梟帥此類皆欲與天皇距戰臣竊為天皇憂之宜今當取天  
 香山壇以造天平倉而祭天社國社之神然後擊虜則易  
 除也天皇既以夢辭為吉兆及聞弟猾之言益喜於  
 懷乃推根津彥著蓑衣服及蓑笠為老人貌又使弟猾被箕為  
 老嫗貌而勅之曰宜汝二人到天香山潛取其巔土而可來旋  
 矣基業成否當以汝為古努力慎焉是時虜兵滿路難



以往還時椎根津彥乃祈之曰我皇當能定此國者行路自通  
 知不能者賊必防禦言訖徑去時羣虜見二人大咲之曰大醜乎  
 大醜此云云教老父嫗嫗則相與關道使行二人得至其山取土來  
 奈淵備句  
 歸於是天皇甚悅乃以此埴造作八十平盆天手扶八十枚  
 秀快此云嚴食而陟于丹生川上用祭天神地祇則於彼菟  
 多爾解難田川之朝原譬如水沫而有所咒著也天皇又因祈之曰吾今  
 當以八十平盆無水造餉餉成則吾必不假鋒刃之威坐平  
 天下乃造餉餉即自成又祈之曰吾今當以嚴發沈于丹生  
 之川如魚無大小悉醉而流譬猶被葉之浮流者彼此云吾必能  
 定此國如其不爾終無所成乃沈嚴食於川其日而于下捕魚  
 黃浮鷄隨水險網時椎根津彥見而奏之天皇大喜乃拔取冊

○頃字下無本有之字

生川上之五百箇真坂樹以祭諸神自此始有嚴食之置也時  
 勅道臣命今以高皇產靈尊朕親作顯齋國時始被此用汝  
 為齋主授以嚴媛之號而名其所置埴為嚴食又火名為嚴香  
 來雷水名為嚴罔象女罔象女此云根名為嚴稻魂女稻魂女  
 伽能薪名為嚴山雷草名為嚴野推冬十月癸巳朔天皇嘗其嚴  
 食之根勅兵而出先擊八十梟帥於國見丘破斬之是役也天  
 皇志存必克乃為御謠之曰伽牟伽茲能伊齊能于淵  
 能於費異之珥夜異波臂旋等倍屢之多儂淵能之多儂淵能阿  
 誤豫阿誤豫之多木淵能異波比茂等倍離于智豆之夜莽務乎  
 智豆之夜莽務諸意以天石喻其國見丘也既而餘黨猶繁其  
 情難測乃願勅道臣命汝宜帥大來目部作大室於忍坂邑盛設

○費一本作富

○願一本作願

我猛卒與虜雜居陰期之曰酒酣之後吾則起歌汝等聞善歌  
聲則一時刺虜已而墜定酒行虜不知我之有陰謀任其情徑  
醉時道臣命乃起而歌之曰於佐箇廼於朋務露夜珥比苦瑳破  
而異離烏利苦毛比苦瑳破而根伊離烏利苦毛滿都滿都志俱  
梅能固邏餓勾穉都都伊異志都都伊毛智于智豆之夜莽務時  
我卒聞歌俱拔其頭稚劍一時殺虜虜無復噍類者皇軍大悅仰  
天而吟因歌之曰伊莽波豫伊莽波豫阿阿時夜塢伊莽儂而毛  
阿誤豫伊莽儂而毛阿誤豫今來目部歌而後大晒是其緣也又  
歌之曰愛滿詩烏吡儂利毛毛那比苦比苦破易陪迺毛多牟伽  
毗毛勢儂此皆承密旨而歌之非敢自專者也時天皇曰戰  
勝而無驕者良將之行也今魁賊已滅而同惡者何向十數羣

○過音候三字  
古本无  
○鳥鳥古本無  
○鳥字  
○壓者妖勢四  
字古本无

其情不可知如何久居一處無以制變乃徙營於別處平有  
一月癸亥朔己巳皇師大舉將攻磯城彥先遣使者徵兄磯城  
兄磯城不承命更遣頭人咫鳥召之時鳥到其營而鳴之曰天  
神子召汝怡笑過怡弊過過音兄磯城忿之曰聞天壓神至而吾  
爲慨憤時奈何鳥鳥若此惡鳴耶壓者乃彎弓射之鳥即避  
去次到弟磯城宅而鳴之曰天神子召汝怡莽過怡莽過時弟磯  
城慄然改容曰臣聞天壓神至旦夕畏懼善乎鳥汝鳴之  
若此者歟即作葉盤八枚盛食饗之葉盤此云因以隨鳥詣到而  
告之曰吾兄兄磯城聞天神子來則聚八十梟帥具兵甲將  
與決戰可早圖之天皇乃會諸將問之曰今兄磯城果有逆  
賊之意召亦不來爲之奈何諸將曰兄磯城黠賊也宜先遣弟磯

日本書紀卷第三

廿三

城曉諭之并說見倉下弟倉下如遂不歸順然後舉兵臨之亦未晚也倉下此云乃使弟磯城開示利害而兄磯城等猶守愚謀不肯承伏時椎根津彥計之曰今者宜先遣我女軍出自忍坂道虜見之必盡銳而赴吾則駢馳勁卒直指墨坂取菟田川水以灌其炭火儵忽之間出其不意則破之必也天皇善其策乃出女軍以臨之虜謂大兵已至舉力相待先是皇軍攻必取戰必勝而介胃之士不無疲弊故聊為御謠以慰將卒之心焉謠曰哆哆奈梅豆伊那嗟能椰摩能虛能莽由毛易喻者摩毛羅毗多多介陪磨和例破椰隈怒之摩途等利宇介譬餓等茂伊莽輪開珥虛彌果以男軍越墨坂從後夾擊破之斬其梟帥兄磯城等十有二月癸巳朔丙申皇師遂擊長髓彥連戰不能取勝時忽然天陰而雨冰乃有金色靈鷲飛來止于皇弓弭其鷲光曄煜

○介香茂等班  
五字熱本古事  
記共元  
下○皆諸本作皆

狀如流電由是長髓彥軍卒皆迷眩不復力戰長髓是邑之本號焉因亦以為人名及皇軍之得瑞也時人仍號鷲邑今云鳥鳥是訛也昔孔舍衛之戰五瀨命中矢而薨天皇衛之常懷憤懣至此役也意欲窮誅乃為御謠之曰瀨都瀨都志俱梅能故選餓介者茂等珥阿波赴珥破介瀨羅毗苦茂苦曾廼餓毛苦曾瀨梅屠那藝豆于答豆之夜莽務又謠之曰瀨都瀨都志俱梅能故選餓介者茂等珥宇惠志破餌介瀨句致明比俱和例破瀧輪例儒于智豆之夜莽務因復縱兵忽攻之凡諸御謠皆謂來目歌此的取歌者而名之也時長髓彥乃遣行人言於天皇曰嘗有天神之子乘天磐船自天降止號曰櫛玉饒速日命速日此云備是娶吾妹三炊屋媛亦名長髓媛亦遂有兒息名曰可美眞手命可美眞手此云故吾以饒速日命為君而奉焉夫天神于魔詩莽耐

○步級一本作步斬

之子豈有兩種乎奈何更稱天神子以奪人地乎吾心推之未必  
 為信天皇曰天神子亦多耳汝所為君是實天神之子者必有表  
 物可相示之長隨彥即取饒速日命之天羽羽矢一隻及步級以  
 奉示天皇天皇覽之曰事不虛也還以所御天羽羽矢一隻及  
 步級賜示於長隨彥長隨彥見其天表益懷隙隙踏然而凶器  
 已構其勢不得中休而猶守迷圖無復改意饒速日命本  
 知天神怒懃唯天孫是與且見夫長隨彥稟性悞狠不可教  
 以天人之際乃殺之帥其衆而歸順焉天皇素聞饒速日命  
 是自天降者而今果立忠効則褒而寵之此物部氏之遠祖也  
 己未年春二月壬辰朔辛亥命諸將練士卒是時層富縣波  
 哆丘岬有新城戶畔者岬此云云又和珥坂下有居勢祝者此云  
 梅齒臍見長柄丘岬有猪祝者此三處土蜘蛛並恃其勇力不

○伽多婁一本作伽多婁可從

肯來庭天皇乃分遣偏師皆誅之又高尾張邑有土蜘蛛其為  
 人也身短而手足長與侏儒相類皇軍結葛網而掩襲殺之因改  
 號其邑曰葛城夫磐余之地舊名片居片居此云亦曰片立片立  
 伽多婁我皇師之破虜也太軍集而滿於其地因改號為磐余或  
 曰天皇往嘗嚴食糧出軍西征是時磯城八十梟帥於彼處屯  
 聚居之屯聚居此云果與天皇大戰遂為皇師所滅故名之曰磐  
 余邑又皇師立誥之處是謂猛田作城處號曰城田又賊衆戰死  
 而僵屍枕枕臂處呼為頰枕田天皇以前年秋九月潛取天香  
 山之墳土以造八十平金弱自齋戒祭諸神遂得安定區宇  
 故號取土之處曰壇安三月辛酉朔丁卯下令曰自我東征於茲  
 六年矣賴以皇天神之威凶徒就戮離邊土未清餘妖尙梗而  
 中洲之地無復風塵誠宜恢廓皇都規摹大壯而今運屬此屯蒙

○此字古本无

○或曰東南常作西南

○已巳舊事紀作乙巳可從

○神八井下當有耳字

民心朴素，集棲穴住，習俗惟常。夫大人立制，義必隨時，苟有利  
 民，何妨？聖造且當披拂山林，經營宮室，而恭臨寶位，以鎮元元。  
 上則答乾靈，授國之德；下則弘皇孫，養正之心。然後兼六  
 合以開都，掩八紘而為宇，不亦可乎？觀夫畝傍山宇彌麻夜摩東  
 南，檀原地者，蓋國之塊區乎？可治之是月，即命有司，經始帝宅。  
 庚申年秋八月癸丑朔戊辰，天皇當立正妃，改廣求華胄。時有  
 人奏之曰：「事代主神共三島溝楸耳神之女玉櫛媛所生兒，號曰  
 媛踏，備五十鈴媛命，是國色之秀者。」天皇悅之，九月壬午朔己巳，  
 納媛踏，備五十鈴媛命，以為正妃。  
 辛酉年春正月庚辰朔，天皇即帝位於檀原宮。是歲為天皇元年。  
 尊正妃為皇后，生皇子神八井命、神薄名川耳尊。故古語稱之曰  
 於畝傍之檀原也。太立齋柱於底磐之根，峻峙搏風於高天之原。

○珍彥類史舊事紀共作椎根津彦

○復一本作又

而始馭天下之天皇。號曰神日本磐余彥火火出見天皇焉。  
 初，天皇章創天基之日也。天降氏之遠祖道臣命帥大來目部  
 奉承密策，能以諷歌倒語掃蕩妖氣，倒語之用始起乎茲。  
 二年春二月甲辰朔乙巳，天皇定功行賞賜。道臣命宅地  
 居于築坂邑，以寵異之。亦使大來目居于畝傍山以西川邊之地。  
 今號來目邑，此其緣也。以珍彥為倭國造，珍彥此云又給弟狷  
 猛田邑，因為猛田縣主。是菟田主水部遠祖也。弟磯城名黑速為  
 磯城縣主，復以劍根者為葛城國造。又頭八咫鳥亦入賞  
 例。其苗裔即葛野主殿縣主部是也。  
 四年春二月壬戌朔甲申，詔曰：「我皇祖之靈也，自天降鑒光，助  
 朕躬。今諸虞已平，海內無事，可以郊祀天神。用申大孝者也。」  
 乃立靈時於鳥見山中。其地號曰上小野榛原，下小野榛原。用

○妍設乎古本  
無乎字  
○映奈瑪下當  
福惠字

○大己貴大神  
古本無大字

祭皇祖天神焉

三十有一年夏四月乙酉朔皇興巡幸因登腋上曠間丘而

廻望國狀曰妍哉乎國之獲矣妍哉此云フ雖內木綿之真透國

猶如蜻蛉之臂吐焉由是始有秋津洲之號也昔伊弉諾尊目此

國曰日本者浦安國細戈千足國磯輪上秀真國秀真國此云フ

復大己貴大神目之曰玉牆內國及至饒速日命乘天磐船而

翔行太虛也睨是鄉而降之故因目之曰虛空見日本國矣

四十有二年春正月壬子朔甲寅立皇子神渟名川耳尊為皇

太子

七十有六年春三月甲午朔甲辰天皇崩于橿原宮時年一百

二十七歲明年秋九月乙卯朔丙寅葬畝傍山東北陵

日本書紀卷第三終

### 日本書紀卷第四

神渟名川耳天皇 綏靖天皇

磯城津彥玉手看天皇 安寧天皇

大日本彥耜友天皇 懿德天皇

觀松彥香殖稻天皇 孝昭天皇

日本足彥國押人天皇 孝安天皇

大日本根子彥太瓊天皇 孝靈天皇

大日本根子彥國牽天皇 孝元天皇

雅日本根子彥太日日天皇 開化天皇

神皇正統記卷第四

神淳名川耳天皇 綏靖天皇

○母下當有皇  
后二字

○大女玉本作  
太女

○哀葬兼本等  
作喪葬

○盛福水本等  
作威福  
○也古本作包  
丑春海日已卯  
丑之誤

○備考日當當  
作嘗  
○時下水本有  
神字

神淳名川耳天皇神日本磐余彥天皇第三子也母曰媛蹈鞫五十鈴媛命事代主神之太女也天皇風姿岐嶷少有雄拔之氣及壯容貌魁偉武藝過人而志尚沈毅至四十八歲神日本磐余彥天皇崩時神淳名川耳尊孝性純深悲慕無已特留心於哀葬之事焉其庶兄手研耳命行年已久歷朝機故亦委事而親之然其王立操厝懷本乖仁義遂以諒闇之際盛福自由苞藏禍心圖害一弟于時也太歲己卯冬十一月神淳名川耳尊與兄神八井耳命陰知其志而善防之至於山陵事畢乃使司部稚彥造弓倭鍛部天津眞浦造眞躰鐵矢部作箭及弓矢既成神淳名川耳尊欲以射殺手研耳命會有手研耳命於片丘武嘗中獨臥于大牀時淳名川耳尊謂神八井耳命

曰今適其時也夫言貴密事宜慎故我之陰謀本無預者今日之事唯吾與爾自行之耳吾當先開窬戶爾其射之因相隨進入神淳名川耳尊突開其戶神八井耳命則手脚戰慄不能放矢時神淳名川耳尊掣取其兄所持弓矢而射手研耳命一發中胸再發中背遂殺之於是神八井耳命慙然自服讓於神淳名川耳尊曰吾是乃兄而懦弱不能致果今汝特挺神武自誅元惡宜哉乎汝之光臨天位以承皇祖之業吾當為汝輔之奉典神祇者是即多臣之始祖也

○或曰宜當當  
作乎說

○備考日都下  
當有於字  
○備考日都下  
當有母字

○后上水本有  
皇字

元年春正月壬申朔己卯神淳名川耳尊即天皇位都葛城是謂高丘宮尊皇后曰皇太后是年也太歲庚辰二年春正月立五十鈴依媛為皇后一書云磯城縣主女川渟諸女系即天皇之姨也后生磯城津彥玉手看天皇

○五月下水本  
有甲子明三字  
一本作甲辰朔

四年夏四月神八井耳命薨御葬守祓傍山北  
二十五年春正月壬午朔戊子立皇子磯城津彥玉手看尊為皇  
太子  
三十三年夏五月天皇不豫癸酉崩時年八十四

磯城津彥玉手看天皇 安寧天皇

磯城津彥玉手看天皇神淳名川耳天皇太子也母曰五十鈴依

媛命事代主神之少女也天皇以神淳名川耳天皇二十五年立

為皇太子年二十一三十三年夏五月神淳名川耳天皇崩其年

七月癸亥朔乙丑太子即天皇位

元年冬十月丙戌朔丙申葬神淳名川耳天皇於倭桃花鳥田丘

上陵尊皇后曰皇太后是年也太歲癸丑

○二十一古本  
作十一  
○太子上古本  
有皇字下同

二年遷都於片鹽是謂淳孔宮

三年春正月戊寅朔壬午立淳名底仲媛命亦曰淳為皇后

城縣主葉江女川津媛一先是后生三皇子第一曰息石耳

命第二曰大日本彥耜友天皇一云生三皇子第一曰常津彥

皇第三曰磯城津彥命

十一年春正月壬戌朔立大日本彥耜友尊為皇太子也弟磯城

津彥命是猪使連之始祖也

三十八年冬十二月庚戌朔乙卯天皇崩時年五十七

大日本彥耜友天皇 懿德天皇

大日本彥耜友天皇磯城津彥玉手看天皇第二子也母曰淳

○三年下一本  
有癸亥二字  
○系水本作絲

○水本日按攝  
天皇立太子時  
年二十一即今  
年實六十歲



○鴨王下集解  
有之字  
○壬戌下一本  
有朔字

名底仲媛命事代主神孫鴨王女也磯城津彦玉手看天皇十  
一年春正月壬戌立為皇太子年十六三十八年冬十二月磯  
城津彦玉手看天皇崩

元年春二月己酉朔壬子皇太子即天皇位秋八月丙午朔葬磯  
城津彦玉手看天皇於畝傍山南御陰井上陵九月丙子朔己丑

尊皇后曰皇太后是年也太歲辛卯

二年春正月甲戌朔戊寅遷都於輕地是謂曲峽宮二月癸卯朔

癸丑立天豐津媛命為皇后一云磯城縣主葉江男弟猪手女泉媛一云磯城縣主太真稚彦女飯日

也後生觀松彦香殖稻天皇一云天皇后弟武

二十三年春三月丁未朔戊午立觀松彦香殖稻尊為皇太子年

十八

三十四年秋九月甲子朔辛未天皇崩

○甲子水本等  
有曰字

三十四年秋九月甲子朔辛未天皇崩

觀松彦香殖稻天皇 孝昭天皇

媛命息石耳命之女也天皇以大日本彦耜友天皇太子也母皇后乘豐津

二月丁未立為皇太子三十四年秋九月大日本彦耜友天皇崩

明年冬十月戊子朔庚子葬大日本彦耜友天皇於畝傍山南織

沙谿上陵

元年春正月丙戌朔甲子皇太子即天皇位夏四月乙卯朔己未

尊皇后曰皇太后七月遷都於掖上是謂池心宮是年也太歲丙

寅

二十九年春正月甲辰朔丙午立世襲是媛為皇后

主葉江女

○甲子舊本記  
作甲午  
○七月上古本  
有秋字

○二月下一本  
有戊午朔三字  
○丁未下一本  
有戊午朔三字  
○戊子水本作  
庚午戊子亦作

○皇后下古本  
有曰字

名城津媛一云倭國豐秋狹木媛女大井媛也后生天足彥國押人命日本足彥國押人天皇

六十八年春正月丁亥朔庚子立日本足彥國押人尊為皇太子年二十天足彥國押人命此相珥臣等始祖也

八十三年秋八月丁巳朔辛酉天皇崩

日本足彥國押人天皇 孝安天皇

日本足彥國押人天皇觀松彥香殖稻天皇第一子也母曰世襲足媛尾張連遠祖瀛津世襲之妹也天皇以觀松彥香殖稻天皇六十八年春正月立為皇太子八十三年秋八月觀松彥香殖稻天皇崩

元年春正月乙酉朔辛卯皇太子即天位秋八月辛巳朔尊皇

○傳事紀曰明年八月葬於掖上博多山上國

己酉朔辛亥三日相也乙酉朔辛卯七日相也

后國皇後是年也天職已道國奉獻皇太子

二十六年春正月己酉朔壬寅立姪押媛齋皇皇后

此并於海春正月己巳朔癸酉立大日本根子彥太瓊尊為皇太子

大尊承根子彥太瓊天皇 孝靈天皇 日本書紀國押人天皇

○蓋以下十一  
字後人加

十六年春正月立為皇太子  
皇崩秋九月甲午朔丙午葬日本足彥國押人天皇于玉手丘上  
陵冬十二月癸亥朔丙寅皇太子遷都於黑田是謂廬戶宮  
元年春正月壬辰朔癸卯太子即天皇位尊皇后曰皇太后是年  
也太歲辛未  
二年春二月丙辰朔丙寅立細媛命為皇后  
等祖女真后生大日本根子彥國牽天皇姬倭國香媛  
倭迹迹日百襲姬命彥五十狹芹彥命  
命亦妃經其弟生彥狹彥命稚武彥命弟稚武彥命是吉備臣之  
始祖也  
三十六年春正月丙辰朔癸卯立彥國牽尊為皇太子

○等祖二字可  
疑未有所考  
也字古本无

○蓋以下十一  
字後人加

大日本根子彥國牽天皇 孝元天皇  
大日本根子彥國牽天皇太子彥太瓊天皇太子櫛母曰  
細媛命磯城縣主大目之女也天皇以大日本根子彥太瓊天皇  
三十六年春正月立為皇太子年十九七十六年春二月大日本  
根子彥太瓊天皇崩  
元年春正月癸未朔甲申太子櫛母天皇位尊皇后曰皇太后是年  
也太歲丁亥  
四年春三月甲申朔甲午遷都於磯城縣原宮  
六年秋九月庚戌朔癸卯葬日本根子彥太瓊天皇于坂丘馬  
城陵

○蓋以下十一  
字後人加



○坂本一本作坂上坂上為坂本

二十八年春正月癸巳朔辛酉立御簡城城於磐野為皇太子年十  
九人... 六十一年夏四月丙辰朔卯好天皇崩冬十月癸丑朔乙卯葬于春  
日卒川坂本陵一云坂上陵時年百十五

... 御間城入彦五十瓊殖天皇崇神天皇... 御間城入彦五十瓊殖天皇雅日本根子太日日天皇第三子也  
母曰伊香色謎命物部氏遠祖大綜麻杵之女也天皇年十九歲  
立為皇太子識性聰敏幼好雄略既壯寬博謹慎崇重神祇  
恒有經綸天業之心焉六十年夏四月稚日本根子大日日天  
皇崩

日本書紀卷第五

○根子下脫彦字下嗣

○綜麻杵下舊事紀有命字

○天業一本作大業

○注一云云々十三字古本在大海下

元年春正月壬午朔甲午皇太子即天皇位尊皇后曰皇太后三  
月辛亥朔丙寅立御間城城為皇后先是后生活目入彦五十狹  
茅天皇彦五十狹茅命國亦姬命手衝倭姬命倭彦命五十日  
鶴彦命又姬紀伊國荒瀨野津津魚眼眼妙媛一云大海宿禰女八

○紀伊與清日  
伊弉諾字

○磯城下玉本  
有郡字

○等字古本  
水共光

○司收熱本  
水作司收

○後明日五年  
六年共無月日  
並史之缺文

○和木本熱本  
等作倭字

○住一本作座

天豐城水產命豐饌兼庭命是年也歲歲甲申命  
三年秋九月遷都於磯城是謂磯城宮  
四年冬十月庚申朔壬午日惟我皇祖諸天皇等光臨  
者豈為一身乎蓋所以司收人神經綸天下故能世  
時流德今朕奉承其運察食黎元何嘗不遵皇祖之  
永保無窮之祚其聖神百億俾爾忠貞並安  
乎日香自播命神階乃敷臨大瀛瀛林之  
國內多疾疫瘡有死者且幾半矣日  
六年百姓流離或有背叛其勢難以德治之是以  
罪神祇先是天照大神和天國魂二神並祭於天皇  
殿之內  
是豐饌入姬命祭於

○系上古本  
使字

○然下水本  
於字下水本  
○夢下古本  
有字

倭笠離國網立磯城神籬亦以日本大國魂神託  
淳名城入姬命祭然淳名城入姬髮落體瘦而不能祭  
七年春三月丁丑朔辛卯詔曰昔我皇祖大啓鴻基其後聖業逾  
高王風博盛不意今當朕世數有炎害恐朝無善政取咎於神祇  
耶蓋命神龜以極致災之所由也於是天皇乃幸于神淺茅原而  
會八千萬神以卜問之是時神明憑倭迹迹自百襲姬命曰天皇  
何憂國之不治也若能敬祭我者必當自平矣天皇問曰教如此  
者誰神也答曰我是倭國域內所居神名為大物主神時得神語  
隨教祭祀然於事無驗天皇乃沐浴齋戒潔淨殿內而禱之曰朕  
禮神尚未盡耶何不尊之甚也冀亦夢教之以畢神恩是夜夢有  
神靈對立殿前自稱天物蓋神曰天皇勿復為意國之不治是  
吾意也若以藉見天網國根字產祭者則立平矣亦有神林之

○目下下一  
本有命字

○假下一本有  
大字  
○主上水本有  
之字

○亦云以下十  
五字一本小書

○不吉下一本  
有冬字

○丁卯二字一  
本作壬申期已  
卯五字

○便一本作便

國自當歸伏秋八月癸卯朔己酉倭迹迹速神淺茅原目妙姬穗積  
臣遠祖大木日宿爾伊勢麻績君三人共同夢而奏言昨夜夢之  
有貴人誨曰以大田田根子命為祭大物主大神之主亦以市  
磯長尾市為祭倭國魂神主必天下太平矣天皇得夢辭益歡於  
心而布告天下求大田田根子即於茅渟縣陶邑得大田田根子  
而貢之天皇即親臨于神淺茅原會諸王卿及八十諸部而問  
大田田根子曰汝其誰子對曰父曰太物主大神母曰活玉依媛  
陶津耳之女亦云奇曰方天曰方武茅渟祇之女也天皇曰朕當  
榮于樂乃卜使物部連祖伊香色雄為神班物者吉之又卜便祭  
他神不吉十一月丁卯命伊香色雄而以物部八十手所作祭神  
之物即以太田田根子為祭大物主大神之主又以長尾市為祭  
倭國魂神之主然後卜祭他神吉焉便別祭八十萬靈神仍定

日本書紀卷第五

四

○辨釋紀作詳

天社國社及神地神於是疫疠始息國內漸謐五穀既成百  
姓饒之  
八年夏四月庚子朔乙卯以高橋邑人活日為大神之掌酒  
在加冬十二月丙申朔乙卯天皇以大田田根子命祭大神是日  
活日自舉神酒獻天皇仍歌之曰許能瀨根破和餓瀨根那羅孺  
標磨等那殊於朋望能農之能介瀨之瀨根伊句臂佐伊句臂佐  
如此歌之宴于神宮即宴竟之諸太夫等歌之曰宇磨佐開瀨和  
能等能能阿佐妬珥毛伊弟氏由介那瀨和能等能渡場於茲天  
皇歌之曰宇磨佐階瀨和能等能能阿佐妬珥毛於辭寐羅箇福  
瀨和能等能渡場即開神宮門而幸行之所謂大田田根子今三  
輪君等之始祖也  
九年春三月甲子辨廣實天皇夢有神犬誨之曰以春曆八

日本書紀卷第五

五

○四月上水本  
有夏字

秋赤承八竿祠墨坂神亦以黑盾八枚黑承八竿祠大坂神四月  
甲午朔己酉依夢之教祭墨坂神大坂神

○憲水本釋記  
共作遺

半年秋七月丙戌朔己酉詔群卿曰導民之本在於教化也  
今既禮神祇灾害皆耗然遠荒人等猶不受正朔是未習王  
化耳其選群卿遣于四方令知朕憲九月丙戌朔甲午以大  
彥命遣北陸武渟川別遣東海吉備津彥遣西道丹波道主命  
遣丹波因以詔之曰若不受教者乃舉兵伐之既而共授印綬  
為將軍壬子大彥命到於和珥坂上時有少女歌之曰  
山背平坂時道側 瀟磨紀異利寐胡播擲 飮酒餓鳥塢 志齊務苦  
有畫女歌之曰 瀟磨紀異利寐胡播擲 飮酒餓鳥塢 志齊務苦  
濃殊末句志羅珥比賈那素寐殊望 卑兵許呂佐務苦須羅句塢  
那志羅珥比賈那素寐殊望 卑兵許呂佐務苦須羅句塢  
言何辭對曰勿

○大彥下古本  
有命字下同

○願字古本无  
異本作而字  
○後一本作日  
○春海曰必後  
問恐脫有字

○安壇上異本  
有與字

言也唯歌耳乃重詠先歌忽不見矣大彥乃還而具以狀奏於  
是天皇姑倭迹迹日百襲姬命聰明叡智能識未然乃知其歌惟  
言于天皇是武埴安彥將謀反之表者也吾聞武埴安彥之妻吾  
圉媛密來之取倭香山土髮領巾頭祈曰是倭國之物實則反之  
物實此云云是以知有事焉非早圖必後之於是更留諸將軍而  
議之未幾時武埴安彥與妻吾田媛謀反逆與師忽至各分道  
而夫從山背婦從大坂共入欲襲帝京時天皇遣五十狹芥彥  
命擊吾田媛之師即遮於大坂皆大破之殺吾田媛悉斬其軍卒  
復遣大彥與和珥臣遠祖彥國葦向山背擊埴安彥爰以思鏡  
坐於和珥武銀坂坐則率精兵進登那羅山而軍之時官軍屯聚  
而踞阻草木因以號其山曰那羅山 踞阻此云布更避那羅山而  
進到輪韓河埴安彥携河屯之各相擾焉故時大改號其河曰挑

日本書紀卷第五



○仰字一本无

海今謂泉河也。壇安彦望之間，彦國葺曰：何由矣？汝與師來耶？對曰：汝逆天無道，欲傾王室，故舉義兵欲討汝。逆是天皇之命也。於是各爭先射。武壇安彦先射，彦國葺不得中。後彦國葺射，壇安彦中胸而殺焉。其軍衆皆退，則追破於河北，而斬首過半。屍骨多溢，故號其處曰羽振苑。亦其卒怖走，屎漏于禪，乃脫甲而逃。之知不得免。叩頭曰：我君故時人號其脫甲處曰伽羅禪。屎處曰屎禪。今謂樟葉訛也。又號叩頭之處曰我君。叩頭是後倭迹迹日百襲姬命爲大物主神之妻。然其神常晝不見而夜來矣。倭迹迹姬命語夫曰：君常晝不見者，分明不得視其尊顏。願暫留之。明日仰欲觀美麗之威儀。大神對曰：言理灼然。吾明日入汝櫛笥而居。願無驚吾形。爰倭迹迹姬命心裏密異之，待明以見櫛笥。遂有美麗小蛇，其長太如衣紐，則驚之叫啼。時大神有恥，忽化入

○不字古本无

○見字古本无  
○損本本作撞

形謂其妻曰：汝不忍命羞吾，還令羞汝。仍踐大虛，登于御諸山。爰倭迹迹姬命仰見而悔之，急居。急居此云云。則著撞陰而薨，乃葬於大市。故時人號其墓謂箸墓也。是墓者日也。人作夜也。神作故運大坂山石而造，則自山至于墓，人民相踵以手遞傳而運焉。時人歌之曰：飫朋佐介，理菟藝廼煩例。屢伊辭務邏塢，多誤辭珥。固佐廣固辭介氏務介茂。冬十月乙卯朔，詔群臣曰：今叛者悉伏誅。畿內無事，唯海外荒俗騷動未止。其四道將軍等，今忽發之丙子將軍等共發路。

○十下一本有  
有字

廿一年夏四月壬子朔己卯，四道將軍以平戎夷之狀奏焉。是歲異俗多歸國內安寧。廿二年春三月朔丑朔丁亥，詔曰：朕初承天位，獲保宗廟，明有新蔽。德澤未廣，是以陰陽譌錯，寒暑失序，疫病多起。百姓



○萬字古本先  
○欲字本先  
○游沐一本亦同

多生妻願其行欲見則隨兄而往之先是兄竊作木刀形似真刀  
當時自佩之弟佩真刀共到淵頭兄謂弟曰淵水清冷願欲共游  
沐弟從兄言各解佩刀置淵邊沐於水中乃兄先上陸取弟真  
刀自佩後弟驚而取兄木刀共相擊矣弟不得拔木刀兄擊弟飯  
入根而殺之故時人歌之曰柳句毛多菟伊頭毛多鷄流餓波鷄  
流多知菟頭邏佐波磨枳佐微那辭珥阿波禮於是甘美韓日狹  
鷄濡淳參向朝廷曲奏其狀則遣吉備津彥與武渟河別以誅出  
雲振根故出雲臣等畏是事不祭大神而有間時丹波冰上人  
名冰香戶邊啓于皇太子活目尊曰己子有小兒而自然言之玉  
鑲石出雲入祭真種之甘美鏡押羽振甘美御神底寶御寶主山  
河之水泳御魂靜挂甘美御神底寶御寶主也蓋此云毛是非似小兒  
之言若有託言乎於是皇太子奏于天皇則勅之使祭

○依網一本作  
依羅

六十二年秋七月乙卯朔丙辰詔曰農天下之大本也民所恃以  
生也今河內狹山埴田水少是以其國百姓怠於農事其多開池  
溝以寬民業冬十月造依網池十一月作苜坂池反折池一云天  
皇居桑

○天皇踐祚之  
四字一本先

六十五年秋七月任那國遣蘇那曷叱知令朝貢也任那者去筑  
紫國二千餘里北阻海以在鷄林之西南天皇踐祚六辰  
十八年冬十二月戊申朔壬子崩時年百二十歲明年秋八月甲  
朔甲寅葬于山邊道上陵



○生而二字玉本无

○及壯二字本无

○備考曰一云以下後人之附錄宜刪永本玉本亦同

○國人下也字永本玉本作乎

○臣字玉本无

○許一本作啓

二年春三月辛未朔己卯立狹穗姬爲皇后后生譽津別命生而天皇愛之常在左右及壯而不言冬十月更都於纏向是謂珠城宮也是歲任那人蘇那曷叱智請之欲歸于國蓋先皇之世來朝未還歟故敦賞蘇那曷叱智仍賚赤絹一百匹賜任那王然新羅人遮之於道而奪焉其二國之怨始起於是時也

○那水穴作那

○於字原本无

○殺食玉本作

○便字原本无

○難波下玉本

○來歸備考作

○羽大天作

○七物玉本作

本國土故號其國謂彌摩那國其是之緣也於是阿羅斯等以給赤網之始也云初都怒我阿羅斯等兵有國之時黃牛負田器將往田舍黃牛忽先則尋迹覓之跡留一郡家中所負物而推之必設所求牛者入於此郡家中然那公等曰由牛所負物而推之必設殺食玉本作便字原本无

○播磨下玉本

于播磨國在於穴栗邑時天皇遣三輪君祖沐友主與倭直祖長

○化歸永本玉

而化歸之仍貢物也然開日本國有聖皇則以臣授弟知古

○木共歸永本

石槍日鏡熊神籬噴狹淺大刀并八物仍詔天日槍曰播磨國出

○有鳥下永本

淺邑淡路島栗邑是二邑汝任意居之時天日槍曰播磨國出

○不見鳥下玉本

將住處若垂天聽是日槍自菟道河親歷視國則合于臣

○村鏡下玉本

邑暫住復更自近江經若狹國西到但馬國則定住處也

○麻多下脫能

江國鏡谷陶人則天日槍之從人也故天日槍娶但馬出島大

○字之字當作也

耳女麻多鳥生但馬諸助也諸助生但馬日槍娶但馬出島大

○永本作形

槽杵日槽杵生清彥清彥生田道間守之日槍娶但馬出島大

○戰字玉本无

四年秋九月丙戌朔戊申皇后母兄狹穗彥王謀反欲危社稷因伺皇后之燕居而語之曰汝孰愛兄與夫焉於是皇后不知所問之意趣輒對曰愛兄也則詭皇后曰夫以色事人色衰寵緩今天下多住人各遞進求寵豈永得特色乎是以

○亦字一本在

冀吾登鴻祚必與汝照臨天下則高枕而永終百年亦不快乎願為我弒天皇仍取此首授皇后曰是此首佩于裊中當天皇寢適刺頸而弒焉皇后於是心裏兢戰不知所如然視兄王

○如王本作殺

志便不可得諫故受其叱首獨無所藏以著衣中遂有諫兄之情

○便字古本无

五年冬十月己卯朔天皇幸來日居於高宮時天皇枕皇后膝而

○於字古本无

晝寢於是皇后既無成事而空思之兄王所謀適是時也即眼淚

○復無解作又

流之落帝面天皇則痛之語皇后曰朕今日夢矣錦色小蛇繞于

○復無解作又

朕頸復大雨從後穗發而來之濡面是何祥也皇后則知不得匿

○復無解作又

謀而悚恐伏地曲上見王之反狀因以奏曰妾不能違兄王之志

○復無解作又

亦不得清天皇之恩告言則見王不言則傾社稷是以一則以

○復無解作又

懼一則以悲懼仰瞻烟進退而血盈目夜懷抱無所訴言靡余

○復無解作又

懼一則以悲懼仰瞻烟進退而血盈目夜懷抱無所訴言靡余

○復無解作又

懼一則以悲懼仰瞻烟進退而血盈目夜懷抱無所訴言靡余

○復無解作又

懼一則以悲懼仰瞻烟進退而血盈目夜懷抱無所訴言靡余

○此一本作究

也天皇枕幸膳而寢之於是幸思疾若者狂婦成况志者適  
遇是時不勞以成功乎茲意未竟眼滿自流則舉袖拭涕從袖溢  
之沾帝面故今日夢也必是事應焉錦色小蛇則授妾七首也天  
兩忽發則妾眼淚也天皇謂皇后曰是非汝罪也即發近縣卒  
命上毛野君遠祖八綱田令擊狹穗彥時狹穗彥與師距之忽積  
稻作城其堅不可破此謂稻城也踰月不降於是皇后悲之曰吾  
雖皇后既亡兄玉何以面目莅天下耶則抱王子譽津別命而入  
之於兄王稻城天皇更益軍衆悉圍其城即勅城中曰急出皇后  
與皇子然不出矣則將軍八綱田放火焚其城於焉皇后令懷抱  
皇子踰城上而出之因以奉請曰妾始所以逃入兄城若有因妾  
子免兄罪乎今不得免乃知妾有罪何得面縛自經而死耳唯妾  
雖死之敢勿忘天皇之恩願妾所掌后官之事宜授好仇丹波

○王子集解作皇子

○春集解曰

○后宮本傳

○湯下座補當

○天良上集解有於是二字

○若下玉本作此人比類乎

○水本日傳

國有五婦人志竝貞潔是丹波道主王之女也道主王者稚日本根子太日天皇  
子孫產坐王子也當納掖庭以盈后官之數天皇聽矣時  
云彦湯隔王之子也  
次與城崩軍衆悉走狹穗彥與妹共死于城中天皇於是美將軍  
八綱田之功號其名謂日向武日向彥八綱田也  
七年秋七月己巳朔乙亥左右奏言當麻邑有勇悍士曰當麻蹶  
速其爲人也強勁以能毀角申鉤恆語衆中曰於四方求之豈  
有比我力者乎何遇強力者而不期死生得爭力焉天皇聞  
之詔羣卿曰朕聞當麻蹶速者天下之力士也若有此人耶  
一臣進言臣聞出雲國有勇士曰野見宿禰試召是人欲當子  
蹶速即相隨後道祖長尾而野見宿禰於是野見宿禰自出雲  
國至則當麻蹶速與野見宿禰相見而相對立各奉是相

○讀字一本无  
○以字一本无  
○折田四宮記  
作折田

○媛一本作媛  
○媛下皇代  
配有名字

○返下類史書  
○事紀共有到字  
○足下古事  
○記代記有忍  
代別命四字

則斷折宮麻厥速之會曾亦斷折其腰而殺之故奪當麻厥速之  
地悉賜野見宿禰是以其邑有腰折田之緣也野見宿禰乃舊行  
焉

十五年春二月乙卯朔甲子喚丹波五女納於掖庭第一曰日

葉酢媛第二曰淳葉田瓊次媛第三曰真砥野媛第四曰筋瓊入

媛第五曰竹野媛秋八月壬午朔立日葉酸媛命為皇后以皇后

弟之三女為妃唯竹野媛者因形姿醜返於本土則羞其見返

葛野自墮輿而死之故號其地謂墮國今謂弟國訛也皇后日葉  
酸媛命生三男三女第一曰五十瓊敷入彥命第二曰大足彥尊  
第三曰大中姬命第四曰倭姬命第五曰稚城瓊入彥命妃淳葉  
田瓊次媛生鐸石別命與膽香足姬命次妃筋瓊入媛生池速別  
命稚津媛命

○是字原本无  
○不目下玉本  
○有是字  
○由玉本作故  
○因下古本有  
○今字  
○鳴玉本作  
○鳴玉本作

○捕獲下玉本  
有獻之二字

○或曰以下七  
字一本小書

二十三年秋九月丙寅朔丁卯詔羣卿曰譽津別王是生年既三  
十鬚髮八指猶泣如兒常不言何由矣因有司而議之冬十月  
乙丑朔壬申天皇立於大殿前譽津別皇子侍之時有鳴鶴度  
太虛皇子仰觀鶴曰是何物耶天皇則知皇子見鶴得言而喜之  
詔左右曰誰能捕是鳥獻之於是鳥取造祖天湯河板舉奏言  
臣必捕而獻即天皇勅湯河板舉云板舉此日汝獻是鳥必敦賞矣  
時湯河板舉遠望鶴飛之方追尋詣出雲而捕獲或曰得于但馬  
國十一月甲午朔乙未湯河板舉獻鶴也譽津別命弄是鶴遂得  
言語由是敦賞湯河板舉則賜姓而曰鳥取造因亦定鳥取部鳥  
養部譽津部

二十五年春二月丁巳朔甲子詔國倭臣遠祖武渟川別和珥臣  
遠祖彥國其中臣連遠祖太麻島物部連遠祖赤手根太伴連遠



○數下二本有  
惟字  
○沖退仙覺抄  
作沖退

○體相下永本  
有入字

○按應本爲寫  
○道水本爲寫  
○美讀下一本  
有國字

○嗣下立字當  
在數字下

○貢奉一本作  
供奉

○冬十月古本  
○秋九月古本  
○甲子甲午之  
誤

○御間城下玉  
本有入彦二字

○仰古一本爲  
命

○天島二字古  
一本先

○出雲下玉本  
有國字

祖武目五太未曰我先皇御間城入彦五步瓊殖天皇惟觀作  
聖欽明聽達漢執謙損志懷冲退網繆機衡禮

祭神祇剋已勤躬日慎一日是以人民富足天下太平也今當朕

世祭祀神祇豈得有怠乎三月丁亥朔丙申離天照大神於豐

相姬命託于倭姬命爰倭姬命求鎮坐大神之處而詣菟田彼幡

彼此云更還之入近江國東廻美濃到伊勢國時天照大神誨倭

佐命曰是神風伊勢國則常世之浪重浪歸國也傍國可憐國也

欲居是國故隨大神教其祠立於伊勢國因與齋宮于五十鈴川

止是謂磯宮則天照大神始自天降之處也一云天皇以倭姬命

大神是以倭姬命以天照大神鎮坐於磯城嚴櫃之本而祠之然

後隨神誨取可已年冬十月甲子遷于伊勢國渡遇宮是時倭大

神悉治天原皇御孫尊神治事原中國之八十魂神我親治大地

官者言已乾焉然先皇御間城天皇雖祭神祇微細未探其源

根以相留於枝葉故其天皇短命也今汝御孫尊是言則不及

而慎祭則汝尊命延長復天下太平矣大神即淳名城雅姬命

臣連祖探湯主而卜之誰人以令祭大倭大神祠於大市長岡

食卜焉因以命淳名城雅姬命既身體悉瘦弱以不能祭是以命大倭直

祖長尾市宿名城雅姬命既身體悉瘦弱以不能祭是以命大倭直

二十六秋八月戊寅朔庚辰天皇勅物部十千根大連曰屢遣

使者於出雲國雖檢校其國之神寶無分明申言者汝親行于出

雲宜檢按定則十千根大連按定神寶而分明奏言之仍令掌神

寶也

二十七年秋八月癸酉朔己卯令祠官卜兵器爲神幣吉之故

弓矢及橫刀納諸神之社仍更定神地神戶以時祠之蓋兵器祭

神祇始興於是時也是歲與屯倉于來自邑  
二十八年冬十月丙寅朔庚午天皇母弟倭彥命薨十一月丙申

日本書紀卷第六

十一

○或一本作葛  
○之聲二字玉  
○本无  
○悲傷玉本為  
○悲

○許或啓之誤  
○欲字應本无  
○則下舊事紀  
○有以字  
○數命下玉本  
○有以皇位任弟  
○王五字

○則下水本應  
○本有遺字  
○使者之二字  
○熱本无

朔于西葬倭彦命牙身狹秘華鳥坂於是集近習者悉生而埋立於陵域數日不死晝夜泣吟遂死而爛鼻之犬鳥聚噉焉天皇聞此泣吟之聲心有悲傷詔羣卿曰夫以生所愛命殉囚者是甚傷矣其雖古風之非良何從自今以後議之止殉  
三十年春正月己未朔甲子天皇詔五十瓊敷命大足彥尊曰汝等各言情願之物也兄王詔欲得弓矢弟王詔欲得皇位於是天皇詔之曰各宜隨情則弓矢賜五十瓊敷命仍詔大足彥尊曰汝必繼朕位  
三十三年秋七月甲戌朔己卯皇后日葉酢媛命一云日葉薨臨葬有日焉天皇詔羣卿曰從死之道前知不可今此行之葬奈之為何於是野見宿禰進曰夫君王陵墓埋立生人是不良也豈得傳後葉乎願令將議便事而奏之則使者喚上出雲國之

○百人應本為  
○人

○或本白治當  
○作合

○化爲應本為  
○白石熱本無  
○白字无  
○祖別命  
○祖別命  
○祖別命

土部壹何人自領土部等取埴以造作人馬及種種物形獻于天皇曰自今以後以是土物更易生人樹於陵墓為後葉之法則天皇於是大喜之詔野見宿禰曰汝之便議寔治朕心則其土物始立于日葉酸媛命之墓仍號是土物謂埴輪亦名立物也仍下令曰自今以後陵墓必樹是土物無傷人焉天皇厚賞野見宿禰之功亦賜鍛地即任土部職因改本姓謂土部臣是土部連等生天皇喪葬之緣也所謂野見宿禰是土部連等之始祖也  
三十四年春三月乙丑朔丙寅天皇幸山背時左右奏言之此國有佳人曰綺戶邊姿形美麗山背大國不遲之女也天皇於茲執矛祈之曰必遇其佳人道路見瑞比至行宮大龜出河中天皇舉矛刺龜忽化為白石謂左右曰因此物而推之必有驗乎仍喚綺戶邊納于後宮生磐衝別命是三尾君之始祖也先是娶山背对

○八百下之子  
異本作也或餘  
○或古本作  
也應本作矣

○十月上集解  
補冬字

○而喚云々六  
應本无

○五十瓊下脫  
數字

幡戶邊生三男第一曰祖別命第二曰五十日足彥命第三曰膽  
 武別命五十日足彥命是子石田君之始祖也  
 三十五年秋九月遣五十瓊敷命于河內國作高石池茅渟池各  
 十月作倭狹城池及迹見池是歲令諸國多開池溝敷八百  
 之以農爲事因是百姓富寬天下太平也  
 三十七年春正月成寅朔立大足彥尊爲皇太子  
 三十九年十月五十瓊敷命居於茅渟菟砥川上宮作劍三千日  
 因名其劍謂川上部亦名曰裸伴裸伴此云阿箇藏于石上神宮  
 也是後命五十瓊敷命俾主石上神宮之神寶云五十瓊敷  
 是後河上而喚名爲河上作本河一千口是時稱爲河上  
 弓削部神矢作部大穴磯部泊祖部玉作部神刑部日置部大刀  
 佩部并十箇品部賜五十瓊皇子其一千口大刀者藏于忍坂  
 邑後從忍坂移之藏于石上神宮是時神乞之言春日臣族名

○中姬下古本  
有命字

○日下神字簡  
本作天

○今下有字水  
本作在

治是今物部首之始也  
 八平七年春二月辛亥朔辛卯五平瓊敷命謂妹夫神姬曰我老  
 也不能掌神寶自今以後必汝主焉大中姬命辭曰吾手弱女夫  
 也何能登天神庫耶神庫此云五十瓊敷命曰神庫雖高我能爲  
 神庫造梯豈煩登庫乎故諺曰神之神庫隨樹梯之此其  
 緣也然遂大中姬命授物部千根大連而令治故物部連等至  
 于今治石上神寶是其緣也昔丹波國桑田村有人名曰襲襲則  
 襲襲家有天名曰足往是天昨山獸名牟士那而殺之則獸腹  
 有八尺瓊勾玉因以獻之是玉今有石上神宮  
 八平八年秋七月己酉朔戊午詔羣卿曰朕聞新羅王子夫日槍  
 初來之時將來寶物今有但馬元爲國人見寶則爲神寶也朕欲  
 見其寶物即日遣使者詔夫日槍之曾孫清彥而令獻於是清彥

○勅水本作敷  
文當在應字

被勅乃自捧神寶而獻之羽太玉一箇足高玉一箇鶴鹿赤石  
玉一箇日鏡一面熊神籬一具唯有小刀一名曰出石則清彥忽  
以為非獻刀子仍匿袍中而自佩之天皇未知匿小刀之  
情欲寵清彥而召之賜酒於御所時刀子從袍中出而顯之天  
皇見之親問清彥曰爾袍中刀子者何刀子也爰清彥知不得  
匿刀子而呈言所獻神寶之類也則天皇謂清彥曰其神寶之豈  
得離類乎乃出而獻焉皆藏於神府然後開寶府而視之小刀自  
失則使問清彥曰爾所獻刀子忽失矣若至汝所乎清彥答曰昨  
夕刀子自然至於臣家乃明日朱焉天皇則惶之且更勿覺是後  
出石刀子自然至于淡路島其島人謂神而為刀子立祠是於今  
所祠也昔有一人乘艇而泊于但馬國因問曰汝何國人也對曰  
新羅王子名曰天日槍則留于但馬娶其國前津耳一云前津見

○是字釋紀元

女麻挖能鳥生但馬諸助是清彥之祖父也  
九十年春二月庚子朔天皇命田道間守遣常世國令求非時  
香菓香菓此云今謂橘是也  
九十九年秋七月戊午朔天皇崩於纏向宮時年百四十歲冬十  
二月癸卯朔壬子葬於菅原伏見陵明年春三月辛未朔壬午田  
道間守至自常世國則資物也非時香菓八竿八縵焉田道間  
守於是泣悲歎之曰受命天朝遠往絕域萬里蹈浪遙度  
弱水弱水是常世國則神仙秘區俗非所臻是以往來之間自經十年  
豈期獨凌峻瀾更向本土乎然賴聖帝之神靈僅得還來今  
天皇既崩不得復命臣雖生之亦何益矣乃向天皇之陵叫哭而  
自死之羣臣聞皆流淚也田道間守是三宅連之始祖也

○秋七月下古  
○本有乙巳二字  
○以崇神二按帝  
○年此作三十九  
○九歲此作百四  
○十歲此作百四  
○明年以下兼  
○本為助行下兼  
○資一本作務  
○有也字  
○期釋紀作斯  
○此處下一本  
○叫應本作叫

日本書紀卷第七  
大足彥忍別天皇  
景行天皇  
成務天皇

日本書紀卷第七

大足彥忍別天皇

稚足彥天皇

大足彥忍別天皇 景行天皇

大足彥忍代別天皇活目入彥五十狹茅天皇第三子也母皇后曰日葉洲媛命丹波道主王之女也活目入彥五十狹茅天皇三十七年立為皇太子時年九十九年春二月活目入彥五十狹茅天皇崩

○忍下諸本有代字  
○注時年廿一四字無本為大  
○水本日春二月未仁記作秋是

日本書紀卷第七

○大正七年

光年秋七月己巳朔己卯太子即天皇位因以改元是年也大歲

○日雅應本作田雅

二年春三月丙寅朔戊辰立播磨稻日大郎姬一云稻日雅姬為皇后后生二男第一曰大碓皇子第二曰小碓尊一書云皇

○春海曰故上恐脫剛字

其第三曰稚其大碓皇子小碓尊一日同胞而雙生天皇異之倭根子皇子則詰於碓故因號其二王曰大碓小碓也是小碓尊亦名日本童男鳥具奈亦曰日本武尊幼有雄略之氣及壯容貌魁偉身長一丈方能扛鼎焉

○幼應本作約

三年春五月庚寅朔卜幸于紀伊國將祭祀羣神祇而不吉乃車駕止之遣屋主忍男武雄心命一云武猪心令祭爰屋主忍男武雄命詣於居於阿備柏原而祭祀神祇仍住九年則娶

紀直遠祖菟道彥之女影媛生武內宿禰

四年春五月甲寅朔甲子天皇幸美濃左右奏言之茲國有佳人曰弟媛容姿端正八坂入彥皇子之女也天皇欲得為妃幸弟媛之家弟媛聞乘輿車駕則隱竹林於是天皇權令弟媛至而居于

泳宮泳宮此云區鯉魚浮池朝夕臨視而戲遊時弟媛欲見其鯉魚遊而密來臨池天皇則留而通之爰弟媛以為夫婦之道古今

達則也然於吾而不便則請天皇曰妾性不欲交接之道今不勝皇命之威暫納帷幕之中然意所不快亦形姿穢陋久

之不堪陪於掖庭唯有妾姊名曰八坂入媛容姿麗美志亦貞潔宜納後宮天皇聽之仍喚八坂入媛為妃生七男六女第

一曰稚足彥天皇第二曰五百城入彥皇子第三曰忍之別皇子第四曰稚倭根子皇子第五曰大酢別皇子第六曰淳尉斗皇女

○五百城下古本有之字下同  
○忍之一本作忍足  
○淳古事配作布忍

○久之二字古本无  
○八坂下古本有入字



○卷四一本作  
眷族

資<sub>ム</sub>森<sub>ハ</sub>屢<sub>カ</sub>略<sub>ス</sub>人民<sub>ハ</sub>是<sub>レ</sub>居<sub>ル</sub>於<sub>レ</sub>御<sub>ノ</sub>木<sub>ニ</sub>此<sub>ニ</sub>川<sub>ニ</sub>三<sub>ニ</sub>曰<sub>ク</sub>麻<sub>ノ</sub>剝<sub>ニ</sub>潛<sub>ニ</sub>聚<sub>ニ</sub>徒<sub>ノ</sub>黨<sub>ノ</sub>居<sub>ル</sub>於<sub>レ</sub>高<sub>ノ</sub>羽<sub>ノ</sub>川<sub>ノ</sub>上<sub>ニ</sub>四<sub>ニ</sub>曰<sub>ク</sub>土<sub>ノ</sub>折<sub>ニ</sub>猪<sub>ノ</sub>折<sub>ニ</sub>隱<sub>ニ</sub>住<sub>ル</sub>於<sub>レ</sub>綠<sub>ノ</sub>野<sub>ノ</sub>川<sub>ノ</sub>上<sub>ニ</sub>獨<sub>ニ</sub>特<sub>ニ</sub>山<sub>ノ</sub>川<sub>ノ</sub>之<sub>レ</sub>險<sub>ニ</sub>以<sub>テ</sub>多<sub>ク</sub>掠<sub>ス</sub>人民<sub>ハ</sub>是<sub>レ</sub>四<sub>ノ</sub>人<sub>也</sub>其<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>據<sub>ル</sub>竝<sub>ニ</sub>要<sub>ス</sub>害<sub>ス</sub>之<sub>レ</sub>地<sub>故</sub>各<sub>レ</sub>領<sub>ス</sub>眷<sub>ノ</sub>屬<sub>ノ</sub>爲<sub>レ</sub>一<sub>ニ</sub>處<sub>之</sub>長<sub>也</sub>皆<sub>レ</sub>曰<sub>ク</sub>不<sub>レ</sub>從<sub>ス</sub>皇<sub>ノ</sub>命<sub>ヲ</sub>願<sub>フ</sub>急<sub>ニ</sub>擊<sub>ス</sub>之<sub>レ</sub>勿<sub>レ</sub>失<sub>ス</sub>於<sub>レ</sub>是<sub>武</sub>諸<sub>ノ</sub>木<sub>等</sub>先<sub>ニ</sub>誘<sub>フ</sub>麻<sub>ノ</sub>剝<sub>之</sub>徒<sub>仍</sub>賜<sub>ニ</sub>赤<sub>ノ</sub>衣<sub>ヲ</sub>禪<sub>及</sub>種<sub>種</sub>奇<sub>ノ</sub>物<sub>兼</sub>令<sub>レ</sub>搗<sub>ス</sub>不<sub>レ</sub>服<sub>之</sub>四<sub>ノ</sub>人<sub>乃</sub>率<sub>テ</sub>已<sub>レ</sub>衆<sub>而</sub>參<sub>來</sub>悉<sub>ニ</sub>捕<sub>メ</sub>誅<sub>ス</sub>之<sub>天皇</sub>遂<sub>ニ</sub>幸<sub>ニ</sub>筑<sub>ノ</sub>紫<sub>ノ</sub>到<sub>レ</sub>豐<sub>前</sub>國<sub>長</sub>峽<sub>縣</sub>與<sub>レ</sub>行<sub>宮</sub>而<sub>レ</sub>居<sub>故</sub>號<sub>其</sub>處<sub>曰</sub>京<sub>也</sub>冬<sub>十</sub>月<sub>到</sub>碩<sub>田</sub>國<sub>其</sub>地<sub>形</sub>廣<sub>大</sub>亦<sub>麗</sub>因<sub>名</sub>碩<sub>田</sub>也<sub>碩</sub>此<sub>云</sub>於<sub>到</sub>速<sub>見</sub>邑<sub>有</sub>女<sub>人</sub>曰<sub>速</sub>津<sub>媛</sub>爲<sub>一</sub>處<sub>之</sub>長<sub>其</sub>間<sub>天</sub>皇<sub>車</sub>駕<sub>保</sub>岐<sub>陀</sub>到<sub>速</sub>見<sub>邑</sub>有<sub>女</sub>人<sub>曰</sub>速<sub>津</sub>媛<sub>爲</sub>一<sub>處</sub>之<sub>長</sub>其<sub>間</sub>天<sub>皇</sub>車<sub>駕</sub>而<sub>自</sub>奉<sub>迎</sub>之<sub>諸</sub>言<sub>茲</sub>山<sub>有</sub>大<sub>石</sub>窟<sub>曰</sub>鼠<sub>石</sub>窟<sub>有</sub>二<sub>土</sub>蜘蛛<sub>住</sub>其<sub>石</sub>窟<sub>一</sub>曰<sub>青</sub>窟<sub>曰</sub>白<sub>窟</sub>又<sub>於</sub>直<sub>入</sub>縣<sub>彌</sub>疑<sub>野</sub>有<sub>三</sub>土<sub>蜘蛛</sub>一<sub>曰</sub>打<sub>媛</sub>二<sub>曰</sub>八<sub>田</sub>三<sub>曰</sub>國<sub>摩</sub>侶<sub>是</sub>五<sub>人</sub>竝<sub>其</sub>爲<sub>人</sub>強<sub>力</sub>亦<sub>衆</sub>類<sub>多</sub>之<sub>皆</sub>曰<sub>不</sub>從<sub>皇</sub>命<sub>若</sub>強<sub>喚</sub>者<sub>與</sub>兵<sub>距</sub>焉<sub>天</sub>皇<sub>惡</sub>之<sub>不</sub>得<sub>進</sub>行<sub>即</sub>留<sub>于</sub>來<sub>田</sub>見

○亦一本作且

○踏盜詰之誤

○打媛一本作折媛

○取一本作拒

○舊下  
一本有面字

○排一本作撰

○海石上  
讀本有日字

○洞  
谷一本作洞

邑<sub>權</sub>與<sub>官</sub>室<sub>居</sub>之<sub>仍</sub>與<sub>羣</sub>臣<sub>議</sub>之<sub>曰</sub>今<sub>多</sub>動<sub>兵</sub>衆<sub>以</sub>討<sub>土</sub>蜘蛛<sub>若</sub>其<sub>畏</sub>我<sub>兵</sub>勢<sub>將</sub>隱<sub>山</sub>野<sub>必</sub>爲<sub>後</sub>愁<sub>則</sub>採<sub>海</sub>石<sub>榴</sub>樹<sub>作</sub>椎<sub>爲</sub>兵<sub>因</sub>簡<sub>猛</sub>卒<sub>授</sub>兵<sub>椎</sub>以<sub>穿</sub>山<sub>排</sub>艸<sub>襲</sub>石<sub>室</sub>土<sub>蜘蛛</sub>而<sub>破</sub>于<sub>稻</sub>葉<sub>川</sub>上<sub>悉</sub>殺<sub>其</sub>黨<sub>血</sub>流<sub>至</sub>踝<sub>故</sub>時<sub>人</sub>其<sub>作</sub>海<sub>石</sub>榴<sub>椎</sub>之<sub>處</sub>海<sub>石</sub>榴<sub>市</sub>亦<sub>血</sub>流<sub>之</sub>處<sub>曰</sub>血<sub>田</sub>也<sub>復</sub>將<sub>討</sub>打<sub>媛</sub>徑<sub>度</sub>彌<sub>疑</sub>山<sub>時</sub>賊<sub>虜</sub>之<sub>矢</sub>橫<sub>自</sub>山<sub>射</sub>之<sub>流</sub>於<sub>官</sub>軍<sub>前</sub>如<sub>雨</sub>天<sub>皇</sub>更<sub>返</sub>城<sub>原</sub>而<sub>卜</sub>於<sub>水</sub>上<sub>便</sub>勒<sub>兵</sub>先<sub>擊</sub>八<sub>田</sub>於<sub>彌</sub>疑<sub>野</sub>而<sub>破</sub>爰<sub>打</sub>媛<sub>謂</sub>不<sub>可</sub>勝<sub>而</sub>請<sub>服</sub>然<sub>不</sub>聽<sub>矣</sub>皆<sub>自</sub>投<sub>洞</sub>谷<sub>而</sub>死<sub>之</sub>天<sub>皇</sub>初<sub>將</sub>討<sub>賊</sub>次<sub>于</sub>柏<sub>峽</sub>大<sub>野</sub>其<sub>野</sub>有<sub>石</sub>長<sub>六</sub>尺<sub>廣</sub>三<sub>尺</sub>厚<sub>一</sub>尺<sub>五</sub>寸<sub>天</sub>皇<sub>祈</sub>之<sub>曰</sub>朕<sub>得</sub>滅<sub>土</sub>蜘蛛<sub>者</sub>將<sub>蹶</sub>茲<sub>石</sub>如<sub>柏</sub>葉<sub>而</sub>舉<sub>焉</sub>因<sub>蹶</sub>之<sub>則</sub>如<sub>柏</sub>葉<sub>止</sub>於<sub>大</sub>虛<sub>故</sub>號<sub>其</sub>石<sub>曰</sub>踏<sub>石</sub>也<sub>是</sub>時<sub>禱</sub>神<sub>則</sub>志<sub>我</sub>神<sub>直</sub>入<sub>物</sub>部<sub>神</sub>直<sub>入</sub>中<sub>臣</sub>神<sub>三</sub>神<sub>矣</sub>十<sub>一</sub>月<sub>到</sub>日<sub>向</sub>國<sub>起</sub>行<sub>宮</sub>以<sub>居</sub>之<sub>是</sub>謂<sub>高</sub>屋<sub>宮</sub>十<sub>三</sub>月<sub>癸</sub>巳<sub>朔</sub>丁<sub>酉</sub>議<sub>討</sub>熊<sub>襲</sub>於<sub>是</sub>



○既古本作貌  
○一本古本作姿  
○下集解稱  
○無惑異本作  
莫憂或勿憂

天皇詔羣卿曰朕聞之襲國有厚鹿文作鹿文者是兩人熊襲之渠帥者也衆類甚多是謂熊襲八十梟帥其鋒不可當焉少興師則不堪滅賊多動兵是百姓之害何不假鋒刀之威坐平其國時有一臣進曰熊襲梟帥有二女兒曰市乾鹿文云弟曰市鹿文容既端正心且雄武宜示重幣以搗納壓下因以伺其消息犯不意之處則曾不血刃賊必自敗天皇詔可也於是示幣欺其二女而納幕下天皇則通市乾鹿文而陽寵時市乾鹿文奏于天皇曰無愁熊襲之不服妾有良謀即令從一二兵於已而返家以多設醇酒令飲已父乃醉而寐之市乾鹿文密斷父弦爰從兵一人進殺熊襲梟帥天皇則惡其不孝之甚而誅市乾鹿文仍以弟市鹿文賜於火國造

○慶國上壹脫

國有佳人曰御刀媛御刀此云彌波迦志則召爲妃生豐國別皇子是日向國造之始祖也

○涉古本作涉

○保釋紀作倍

○瀨一本作瀨

○邦歌也以下  
諸本連續天皇

十七年春三月戊戌朔己酉幸于湯縣遊于丹裳小野時東望之謂左右曰是國也直向於日出方故號其國曰日向也是日涉野中大石憶京都而歌之曰波辭枳豫辭和藝幣能伽多由區毛位多知區慕夜摩苦波區珥能摩保邏摩多多儺豆久阿烏伽枳夜摩許恭例屢夜摩苦之子漏破試異能知能摩曾祢務比苦破多多瀨許恭幣遇利能夜摩能志邏伽之迦延陽于受珥左勢許能固是謂思邦歌也

十八年春三月天皇將向京以巡狩筑紫國始到夷守是時於石瀨河邊人衆聚集於是天皇遙望之詔左右曰其集者何人也若賊乎乃遣兄夷守弟夷守一人令觀乃弟夷守還來而諮之曰諸

○海路下類史  
季本有而字  
○之字一本无  
○慶類史作岸  
下同  
○光字類史无  
抄類史作托  
○火國下異本  
有也字  
○渡一本作度  
○都一本爲觀

縣君泉媛依獻太御食而人其族會之夏四月壬戌朔甲子到熊縣其處有熊津彥者兄弟二人天皇先使徵兄熊則從使詣之因徵弟熊而不來故遣兵誅之壬申自海路泊於葦北小島而進食時召山部阿弭古之祖小左令進冷水適是時島中無水不知所爲則仰之祈于天神地祇忽寒泉從崖傍涌出乃酌以獻焉故號其島曰水島也其泉今猶在水島崖也五月壬辰朔從葦北發船到火國於是日沒也夜冥不知著岸遙視火光天皇詔挾抄者曰直指火處因指火往之即得著岸天皇問其火光處曰何謂邑也國人對曰是八代縣豐村亦尋其火是誰人之火也然不得主茲知非人火故名其國曰火國六月辛酉朔癸亥自高來縣渡玉杵名邑時殺其處之士蜘蛛津頗焉丙子到阿蘇國也其國郊原曠遠不見人居天皇曰是國有人乎時有二神曰阿蘇都彥阿蘇

○暉謂本作光  
下同  
○覆上一本有  
○也字一本无  
○前山類史熱  
○粟等字或曰粟  
○水沼一本作  
御沼  
○由以下諸本  
有而字

都媛忽化人以遊詣之曰吾工人在何無人耶故號其國曰阿蘇秋七月辛卯朔甲午到筑紫後國御木居於高田行宮時有僵樹長九百七十丈焉百寮蹈其樹而往來時人歌曰阿佐志毛能彌概能佐烏麼志魔幣菟者彌伊和哆羅秀幕彌開能佐烏麼志爰天皇問之曰是何樹也有一老夫曰是樹者歷木也嘗未僵之先當朝日暉則隱杵島山當夕日暉覆阿蘇山也天皇曰是樹者神木故是國宜號御木國丁酉到入女縣則越前山以南望粟畑詔之曰其山峯岫重疊且美麗之甚若神有其山乎時水沼縣主猿大海奏言有女神名曰八女津媛常居山中故八女國之名由此起也八月到的邑而進食是日膳夫等遺蓋故時人號其志蓋處曰淨羽今謂的者訛也昔筑紫俗號蓋曰淨羽

十九年秋九月甲申朔癸卯天皇至自日向

○二十年河海  
爲二十三年

二十年春三月辛巳朔甲申遣五百野皇女令祭天照大神  
二十五年秋七月庚辰朔壬午遣武內宿禰令察北陸及東方諸  
國之地形且百姓之消息

○現本本作

二十七年春二月辛丑朔壬子武內宿禰自東國還之奏言東夷  
之中有日高見國其國人男女並椎結文身爲人勇悍是摠曰蝦  
夷亦土地沃壤而曠之擊可取也秋八月熊襲亦反之侵邊境不  
止冬十月丁酉朔己酉遣日本武尊令擊熊襲時年十六於是日  
本武尊曰吾得善射者欲與行其何處有善射者焉或者啓之曰  
美濃國有善射者曰弟彥公於是日本武尊遣葛城人宮戶彥喚  
弟彥公故弟彥公備率石占橫立及尾張田子之稻置乳近之稻  
置而來則從日本武尊而行之十二月到於熊襲國因以伺其消  
息及地形之嶮易時熊襲有魁帥者名取石鹿文亦曰川上梟帥

○乳近本本作

○名下諸本有  
曰字  
○也字一本无  
○賤賤本本作  
賤賊可從賊  
○聽字一本无  
○一字一本无

悉集親族而欲宴於是日本武尊解髮作童女姿以密伺川上  
梟帥之宴時仍劍佩裊裏入於川上梟帥之宴室居女人之  
中川上梟帥感其童女容姿則攜手同席舉杯令飲而戲弄于  
時也更深人闌川上梟帥且被酒於是日本武尊抽裊中之劍刺  
川上梟帥之胸未及之死川上梟帥叩頭曰且待之吾有所言時  
日本武尊置劍待之川上梟帥啓之曰汝尊誰人也對曰吾是  
大足彥天皇之子也名日本童男也川上梟帥亦啓之曰吾是國  
中之強力者也是以當時諸人不勝我之威力而無不從者吾多  
遇武力矣未有若皇子者是以賤賤陋口以奉尊號若聽乎  
曰聽之即啓曰自今以後號皇子應稱日本武皇子言訖乃通  
胸而殺之故至于今稱曰日本武尊是其緣也然後遣弟彥等悉  
斬其黨類無餘唯一既而從海路還倭到吉備以渡穴海其處有

○皆下諸本有  
有字

○日本武下  
本有尊字

惡神則殺之亦比至難波殺柏濟之惡神和多利  
二十八年春二月乙丑朔日本武尊奏平熊襲之狀曰臣賴天皇  
之神靈以兵一舉頓誅熊襲之魁帥者悉平其國是以西洲既  
謐百姓無事唯吉備穴濟神及難波柏濟神皆害心以放毒氣  
令苦路人竝為禍害之藪故悉殺其惡神竝開水陸之徑天皇於  
是美日本武之功而異愛焉  
四十年夏六月東夷多叛邊境騷動秋七月癸未朔戊戌天皇詔  
羣卿曰今東國不安暴神多起亦蝦夷悉叛屢略人民遣誰人以  
平其亂羣臣皆不知誰遣也日本武尊奏言臣則先勞西征是  
役必大確皇子之事矣時大確皇子愕然之逃隱草中則遣使者  
召來爰天皇責曰汝不欲矣豈強遣耶何未對賊以豫懼甚焉因  
此遂封美濃仍如封地是身毛津君守君二族之始祖於是日本

○水本日根當  
作巢

○醫一本作髮

○則下我字  
本无

○順下隸字一  
本有之宜加之

武尊雄詰之田熊襲既平未經幾年今更東夷叛之何日逮于太  
平矣臣雖勞之頓平其亂則天皇持斧鉞以授日本武尊曰朕聞  
其東夷也識性暴強凌犯為宗村之無長邑之勿首各貪封境竝  
相盜略亦山有邪神郊有姦鬼遮衢塞徑多令苦人其東夷之中  
蝦夷是尤強焉男女同居父子無別冬則宿穴夏則住標衣毛飲  
血昆弟相疑登山如飛禽行艸如走獸承恩則忘見怨必報是以  
箭藏頭髻刀佩衣中或聚黨類而犯邊界或伺農桑以畧人民擊  
則隱艸追則入山故往古以來未染王化今朕察汝為人及身體  
長大容姿端正力能扛鼎猛如雷電所向無前所攻必勝即知之  
形則我子實則神人是寔天怒朕不穀且國不平令經綸天業  
不絕宗廟乎亦是天下則汝天下也是位則汝位也願漢謀遠慮  
探姦伺變示之以威懷之以德不煩兵甲自令臣順即巧言

○或本曰是歲當作是月

調暴神振武以攘姦鬼於是日本武尊乃受斧鉞以再拜奏之  
 日嘗西征之年賴皇靈之威提三尺劍擊熊襲國未經浹辰賊首  
 伏罪今亦賴神祇之靈借天皇之威往臨其境示以德教猶有不  
 服即舉兵擊仍重再拜之天皇則命吉備武彥舉大伴武日連  
 令從日本武尊亦以七榑脛爲膳夫冬十月壬子朔癸丑日本武  
 尊發路之戊午枉道拜伊勢神宮仍辭于倭姬命曰今被天皇  
 之命而東征將誅諸叛者故辭之於是倭姬命取艸薙劍授日  
 本武尊曰慎之莫怠也是歲日本武尊初至駿河其處賊陽從之  
 欺曰是野也麋鹿甚多氣如朝霧足如茂林臨而應狩日本武尊  
 信其言入野中而覓獸賊有殺王之情王謂日本武尊也放火燒其野王  
 知被欺則以燧出火之向燒而得免一云王所佩劍雲自抽之薙王之傍則因

○距一本作拒  
 ○或字古本无  
 ○本本曰神之疑神人之說  
 ○首帥一本爲

是得免故號其劍曰剛薙王曰殆被欺則悉焚其賊衆而滅之故  
 也蓼雲此云茂羅玖毛  
 號其處曰燒津亦進相摸欲往上總望海高言曰是小海耳可立  
 跳渡乃至于海中暴風忽起王船漂蕩而不可渡時有從王之  
 妾曰弟橘媛穗積氏忍山宿禰之女也啓王曰今風起浪湧王船  
 欲沒是必海神心也願以妾之身贖王之命而入海言訖乃披瀾  
 入之暴風即止船得著岸故時人號其海曰馳水也爰日本武尊  
 則從上總轉入陸奧國時大鏡懸於王船從海路迴於葦浦橫渡  
 玉浦至蝦夷境蝦夷賊首島津神國津神等屯於竹水門而欲距  
 然遙視王船豫怖其威勢而心裏知之不可勝悉捨弓矢望拜  
 之曰仰視君容秀於人倫若神之乎欲知姓名王對之曰吾是現  
 人神之子也於是蝦夷等悉慄則褰裳披浪自扶王船而著岸  
 仍面縛服罪故免其罪因以俘其首帥而令從身也蝦夷既平自

○進食上一本有食字

○加一本作伽

日高見國還之西南歷常陸至甲斐國居于酒折宮時舉燭而進食是夜以歌之問侍者曰珥比麼利菟玖波陽須擬氏異玖用加彌菟流諸侍者不能答言時有秉燭者續王歌之末而歌曰伽俄奈倍氏用珥波虛虛能用比珥波苦陽伽陽即美秉燭人之聽而敦賞則居是宮以鞞部賜大伴連之遠祖武日也於是日本武尊曰蝦夷凶首咸伏其辜唯信濃國越國頗未從化則自甲斐北轉歷武藏上野西逮于碓日坂時日本武尊每有顧弟橘媛之情故登碓日嶺而東南望之三歎曰吾孀者耶此三故因號山東諸國曰吾孀國也於是分道遣吉備武彥於越國令鑿察其地形峻易及人民順不則日本武尊進入信濃是國也山高谷幽翠嶺萬重人倚杖而難升巖嶮磴紆長峯數千馬頓轡而不進然日本武尊披烟凌霧遙徑大山既逮于峯而飢之食於山中

○徑古本作經

○山神下當入將字數

山神令苦王以化白鹿立於王前王異之以一箇蒜彈白鹿則中眠而殺之爰王忽失道不知所出時白狗自來有導王之狀隨狗而行之得出美濃吉備武彥自越出而遇之先是度信濃坂者多得神氣以瘼臥但從殺白鹿之後踰是山者嚼蒜塗人及牛馬自不中神氣也日本武尊更還於尾張即娶尾張氏之女官寶媛而淹畱踰月於是聞近江膽吹山有荒神即解劍置於官寶媛家而徒行之至膽吹山山神化大蛇當道爰日本武尊不知主神化蛇之謂是大蛇必荒神之使也既得殺主神其使者豈足求乎因跨蛇猶行時山神之興雲零水峯霧谷噎無復可行之路乃接連不知其所跋涉然凌霧強行方僅得出猶失意如醉因居山下之泉側乃飲其水而醒之故號其泉曰居醒泉也日本武尊於是始有痛身然稍起之還於尾張爰不入官寶媛之家便移伊勢

○水古本作冰路應本作所

○居醒泉一本作醒居泉

○逢水本作志  
○此本水本  
共作是字

○愷佛兼本作  
○然下錯亂  
今據古本改之

○水本日按二  
十七年日  
本武尊時年十  
六據之至四十  
三年當三十二  
今日三十蓋有  
脫字

○喉集解作便

○不字應本无

而到尾津昔日本武尊向東之歲停尾津濱而進食是時解一劍  
置於松下遂忘而去今至於此劍猶存故歌曰鳥波利理多陀理  
霧伽幣流比苦菟麻菟阿波例比等菟麻菟比苦珥阿利勢磨岐  
農岐勢摩之陽多知波開摩之陽逮于能褒野而痛甚之則以所  
俘蝦夷等獻於神官因遣吉備武彥奏之於天皇曰臣受命天朝  
遠征東夷則被神恩賴皇威而叛者伏罪荒神自調是以卷  
甲戡戈愷佛還之冀曷日曷時復命天朝然天命忽至隙驪  
難停是以獨臥荒野無誰語之豈惜身亡唯愁不面  
既而崩于能褒野時年三十天皇聞之寢不安席食不甘味  
晝夜喉咽泣悲標辨因以大歎之曰我子小碓王昔能褒叛之  
日未及總角久煩征伐既而恒在左右補除不及然東夷騷動  
勿使誠者忍愛以入賊境一日之無不願是以朝夕進退侍待還

○棺觀水本類  
史作棺椁

○是歲二字諸  
本无  
○本四十三  
本為三十三  
而  
○群類本  
類本為四  
類本為四  
類本為四

○必類史作心  
○關諸本作問  
○曰下一本有  
理字

自何禍兮何罪兮不意之間倏亡我子自今以後與誰人之經綸  
鴻業耶即詔羣卿命百寮仍葬於伊勢國能褒野陵時日本武尊  
化白鳥從陵出之指倭國而飛之羣臣等因以開其棺觀而視之  
明衣空留而屍骨無之於是遣使者追尋白鳥則停於倭琴彈原  
仍於其處造陵焉白鳥更飛至河內雷舊市邑亦其處作陵故時  
人號是三陵曰白鳥陵然遂高翔上天徒葬衣冠因欲錄功名即  
定武部也是歲天皇踐祚四十三年焉  
五十一年春正月壬午朔戊子招羣卿而宴數日矣時皇子  
稚足彥尊武內宿禰不參赴于宴庭天皇召之問其故因以奏之  
曰其宴樂之日羣卿百寮必情在戲遊不存國家若有狂生而伺  
牆閣之隙乎故侍門下備非常時天皇謂之曰灼然灼然此云則  
異龍焉秋八月己酉朔壬子立稚足彥尊為皇太子是日命武內

○水本曰按自初日本武尊至不武彦主與上不相承繼當在

○伊勢本為伊佐伯部之下北本有別字

○鼓水本熱本共為別本為綾一本作媛

宿禰為棟梁之臣初日本武尊所佩艸薙橫刀是今在尾張國年魚市郡熱田社也於是所獻神宮蝦夷等晝夜喧譁出入無禮時倭命曰是蝦夷等不可近就於神宮則進上於朝廷仍令安置御諸山傍未經幾時悉伐神山樹叫呼鄰里而脅人民天皇聞之詔羣卿曰其置神山傍之蝦夷是本有獸心難住中國故隨其情願命班邦畿之外是今播磨讚岐伊勢安藝阿波凡五國佐伯部之祖也初日本武尊娶兩道入姬皇女為妃生稻依別王次足仲彥天皇次布忍入姬命次稚武王其兄稻依別王是犬上君武部君凡三族之始祖也又如吉備武彥之女吉備穴戸武媛生武鼓王與十城別王其兄武卵王是讚岐綾君之始祖也弟十城別王是伊豫別君之始祖也次妃穗積氏忍山宿禰之女弟橘媛生稚武彥王

○東海年中行事抄作東國

○給一本作給

○拜兼本作領

○到歷本作則

五十二年夏五月甲辰朔丁未皇后播磨太郎媛薨秋七月癸卯朔己酉立八坂入媛命為皇后  
五十三年秋八月丁卯朔天皇詔羣卿曰朕願愛子何月止乎冀欲巡狩小碓王所平之國是月乘輿幸伊勢轉入東海冬十月至上總國從海路渡淡水門是時聞覺賀鳥之聲欲見其鳥形尋而出海中仍得白蛤於是膳臣遠祖名磐鹿六鴈以蒲為手纏白蛤為膾而進之故美六鴈臣之功而賜膳大伴部十二月從東國還之居伊勢也是謂綺宮  
五十四年秋九月辛卯朔己酉自伊勢還於倭居纏向宮  
五十五年春二月戊子朔壬辰以彥狹島王拜東山道十五國都督是豐城命之孫也然到春日穴昨昆臥病而薨之是時東國百姓悲其王不至竊盜王尸葬於上野國



五十六年秋八月詔御諸別王曰汝父彥狹島王不得向在所而  
 早薨故汝專領東國是以御諸別王承天皇命且欲成父業則行  
 治之早得善政時蝦夷騷動即舉兵而擊焉時蝦夷首帥足振邊  
 大羽振邊遠津間男邊等叩頭而來之頓首受罪盡獻其地因以  
 免降者而誅不服是以東久之無事焉由是其子孫於今有東國  
 五十七年秋九月造坂手池即竹詩其堤上冬十月令諸國與田  
 部屯倉

○降一本作和  
 ○又爲除  
 ○東下一本加  
 ○久契本作方

○宮下一本有  
 也字  
 ○水本曰按題  
 下分注立太  
 子時年二十一  
 歲之是年應百  
 四十三歲此作  
 百六十三歲疑  
 有脫時云々  
 注六字北水爲細

五十八年春二月辛丑朔辛亥幸近江國居志賀三歲是謂高穴  
 穗宮  
 六十年冬十二月乙酉朔辛卯天皇崩於高穴穗宮時年一百六  
 歲

稚足彥天皇 成務天皇

稚足彥天皇大足彥忍代別天皇第四子也母后曰八坂入姬命  
 八坂入彥皇子之女也大足彥天皇四十六年立爲太子年二十  
 四六十年冬十一月大足彥天皇崩  
 元年春正月甲申朔戊子皇太子即位是年也太歲辛未  
 二年冬十一月癸酉朔壬午葬大足彥天皇於倭國之山邊道上  
 陵尊皇后曰皇太后

○本本曰按  
 ○行立爲太子  
 ○此本本元  
 ○立字玉本元  
 ○太子上一本  
 ○有皇子  
 ○即下書事紀  
 ○有天皇二字

三年春正月癸酉朔己卯以武內宿禰爲大臣也初天皇與武內

宿禰同月生之故有異寵焉

四年春三月丙寅朔詔之曰我先皇大足彥天皇聰明神武膺籙  
 受圖治天順人撥賊反正德伴覆齋道協造化是以普天奉  
 土莫不王臣稟氣懷靈何非得處公朕嗣踐寶祚夙夜兢惕然

○齊一本作歷  
 ○治一本作治  
 ○而治本給水本

黎元蠢爾不悅野心是國郡無君長縣邑無首渠者焉自今以後  
國郡立長縣邑置首即取當國之幹了者任其國郡之首長是為  
中區之蕃屏也

五年秋九月令諸國以國郡立造長縣邑置稻置竝賜楯矛以  
為表則隔山河而分國縣隨阡陌以定邑里因以東西為  
日縱南北為日橫山陽日影面山陰日背面是以百姓安居天  
下無事焉

四十八年春三月庚申朔立甥足仲彥為皇太子  
六十年夏六月己巳朔己卯天皇崩時年一百七歲

日本書紀卷第七終

○有池而白鳥一木作地  
○皇太子上一本有  
○無所考  
○而仲無此生於  
○然則日本武尊也  
○年三分注云時  
○年八分注云時  
○至成務四十六  
○年日行帝四三  
○辛未本位一按  
○疑武生後此理可  
○如武生後此理可  
○年武生後此理可  
○字此武生後此理可  
○○為下當補也

○物下本作姪  
○仲下本作姪  
○景行本曰按  
○年行本曰按  
○二行本曰按  
○當行本曰按  
○一當行本曰按  
○為行本曰按  
○亦行本曰按  
○共行本曰按  
○七行本曰按

### 日本書紀卷第八

足仲彥天皇 仲哀天皇

足仲彥天皇日本武尊第三子也母皇后日兩道入姬命活目入  
彥五十狹茅天皇之女也天皇容姿端正身長十尺稚足彥天皇  
四十八年立為太子時年三稚足彥天皇無男故立為嗣六十

年天皇崩明年秋九月壬辰朔丁酉葬于倭國狹城盾列陵  
多美

元年春正月庚寅朔庚子太子即天皇位秋九月丙戌朔尊母皇  
后曰皇太后冬十一月乙酉朔詔羣臣曰朕未逮于弱冠而父王  
既崩之乃神靈化自鳥上天仰望之情一日勿息是以冀獲自鳥  
養之於陵城之池因以觀其鳥欲慰願情則令諸國俾貢自鳥

○浦上脫蓋髮二字

○赴應本作起

○無字一本无

○申下一本連

閏十一月乙卯朔戊午越國貢白鳥四隻於是送鳥使人宿菟道河邊時蘆髮蒲見別王視其白鳥而問之曰何處將去白鳥也越人答曰天皇戀父王而將養狎故貢之則蒲見別王謂越人曰雖白鳥而燒之則為黑鳥仍強之奪白鳥而將去爰越人參赴之請焉天皇於是惡蒲見別王無禮於先王乃遣兵卒而誅矣蒲見別王則天皇之異母弟也時人曰父是天也兄亦君也其慢天違君何得免誅耶是年也太歲壬申

二年春正月甲寅朔甲子立氣長足姬尊為皇后先是娶叔父彥人大兄之女大中姬為妃生磯坂皇子忍熊皇子次娶來熊田造祖大酒主之女弟媛生子譽屋別皇子二月癸未朔戊子幸角鹿即興行宮而居之是謂筒飯宮即月定淡路屯倉三月癸丑朔丁卯天皇巡狩南國於是留皇后及百寮而從駕二三卿大夫及官

○是時上讀本有當字

○鯽魚上一本有海字

○王一本作主實古本作資

○百枝上讀本有五字

人數百而輕釋老至紀伊國而居于德勤津宮是時熊襲叛之不朝貢天皇於是將討熊襲國則自德勤津發之浮海而幸穴門即日使遣角鹿勅皇后曰便從其津發之運於穴門夏六月辛巳朔庚寅天皇泊于豐浦津且皇后從角鹿發而行之到淳田門食於船上時海鯽魚多聚船傍皇后以酒灑鯽魚鯽魚即醉而浮之時海人多獲其魚而歡曰聖王所賞之魚焉故其處之魚至乎六月常傾浮如醉其是之緣也秋七月辛亥朔乙卯皇后泊豐浦津是日皇后得如意珠於海中九月興宮室于穴門而居之是謂穴門豐浦宮

八年春正月己卯朔壬午幸筑紫時岡縣主祖熊鸕聞天皇車駕豫拔取百枝賢木以立九尋船之舳而上枝掛白銅鏡中枝掛十握劍下枝掛八尺瓊參迎于周芳沙塵之浦而獻魚鹽地因以

○鹽地一本為  
水木曰阿類  
史作山岡二字

○抄類史作格

○海一本作湖  
自洞下蓋脫  
海字

奏言自穴門至向津野大濟為東門以名籠屋大濟為西門限沒  
利島阿閉島為御宮割柴島為御飯御飯此云以逆見海為鹽地  
既而導海路自山鹿岬廻之入岡浦到水門御船不得進則問熊  
鰐曰朕聞汝熊鰐者有明心以參來何船不進熊鰐奏之曰御船  
所以不得進者非臣罪是浦口有男女二神男神曰大倉主女  
神曰菟夫羅媛必是神之心歎天皇則禱之以挾抄者倭國菟田  
人伊賀彥為祝令祭則船得進皇后別船自洞海洞此云入之  
潮溷不得進時熊鰐更還之自洞奉迎皇后則見御船不進惶懼  
之忽作魚沼鳥池悉聚魚鳥皇后看是魚之遊而忿心稍解及潮  
滿即泊于岡津又筑紫伊視縣主祖五十迹手聞天皇之行拔取  
五百枝賢木立于船之舳上枝掛八尺瓊中枝掛白銅鏡下枝  
掛波握劍參迎于穴門引島而獻之因以奏言臣敢所以獻是物

○鹽下蓋脫珂  
字

○海下古本有  
字

○美女一本作  
處女

○此下蓋脫云  
字

○鹽炎下古本  
及古事記有類  
字

○周宮一本作  
周宮

者天皇如丞天瓊之勾以曲妙御宇且如白銅鏡以分明看行山  
川海原躬提是寺握劍平天下矣天皇即美五十迹手曰伊蘇志  
故時人號五汁迹手之本土曰伊蘇國今謂伊視者訛也已亥到  
難縣因以居檀日官秋九月乙亥朔己卯詔羣臣以議討熊襲  
時有神託皇后而誨曰天皇何憂熊襲之不服是齋之空國也豈  
足舉兵伐乎愈茲國而有寶國譬如美女之賤有向津國此麻  
眼炎之金銀彩色多在其國是謂栲衾新羅國焉若能祭吾者  
則曾不血及其國必自服矣復熊襲為服其祭之以天皇之御船  
及穴門直踐立所獻之水田名大田是等物為幣也天皇聞神言  
有疑之情便登高岳遙望之大海曠遠而不見國於是天皇對神  
曰朕聞望之有海無國豈於太虛有國乎誰神徒誘朕復我皇  
祖諸天皇等盡祭神祇豈有遺神耶時神亦託皇后曰如天